ベンジョサンダリスト！

山本　水城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベンジョサンダリスト！

【Ｎコード】

Ｎ０８３１Ｗ

【作者名】

山本　水城

【あらすじ】

豪華で広大で壮麗ではあるが、恐ろしく過酷な気候環境にある職場。そんな岡野マヒルの職場の最寄駅は、Ｈ蔵門線Ｎ田町駅。そこには、東京一長かったかもしれないエスカレーターがある。ある朝、マヒルはそのエスカレーターで、あるものを履いた男性を目撃した。

PROLOGUE

PROLOGUE

大江戸線ができるまでは、東京で「一番長かったのではないか？」と思われる、地下鉄H蔵門線N田町駅のエスカレーターで、マヒルは久し振りに、『それ』を見てしまった。

エスカレーターの左側は、本来の利用法。すなわち、段の上にじっとのっかっていると、人間が上へ上へと運ばれていく。そして、右側は、いわゆる逆トレッドミル的な使い方がなされるのが一般的である東京の地下鉄エスカレーターである。その日も、その左側の方に、マヒルはおとなしくのっかっていた。

何気なく視線を上げると、一段上には勤め人らしき男が立っている。

……四十前後かな？

ディバッグを背負って、白いYシャツ。

紺のポリエステル混ウール風のスラックス姿だが、ジャケットは着ていない。

典型的に平均的な「役人」風。

でも、I種キャリアっていう感じでもないような、何となくだけど。

印刷局とか、県立高校の事務室とかにいそうな？

うん。現業公務員っぽいかなあ。そんな感じもする。

その男を見たマヒルの第一印象は、こんな感じだった。

マヒルは、男の足下に落とした。

紺のスニーカー用コットンソックス。数回洗濯済みって感じ。

その足に履かれていたのは……。

便所サンダルだった。

それも、ものの見事に『黄土色』の。

あまつさえ、薄いマーブル模様まで入っているではないか。

なんとも、昨今では、ちょっとお目にかかれないオーソドックス・バージョンだった。

各停列車しか停まらない私鉄駅前の商店街にある、年に数回の小中学校指定体育館ばきの売上で生き延びているような、ひなびた履物屋に置いてある便所サンダルだって、今時、水色やピンクといったファンシーカラーだというのに！

マヒルは考えた。

……何だろね。足の指股あたりの深刻な病でも患ってらっしゃるのだろうか。

やっぱ、そういった闘病生活には、便所サンダルが基本なのかなあ。ビルケンシュトックとかのオシャレな履物、買ってる場合じゃないのかな？　薬代がかさむとか？

「早く治るといいですね」

マヒルは心の中で、紺ソックスの勤め人にそっと語りかけた。

1

1

マヒルの朝は早い。
最近は。

上司のおばさまからの再三の厭味にさすがに耐えかね、始業時刻の三十分前には、席に着くようにしたのである。とりあえず。

なんだか、日本って『朝早く出勤すること』が美徳だよねぇ。ヨーロッパのデパートなんて始業時間に店は開いても、それから開店準備してるじゃん？
マヒルの心の声は、こんな感じではあったのだが。

とはいえ、そんな感じで早めに出勤するようになってから、六月に出会って以来、とんと見かけていなかったあの『彼』に、そう、便所サンダルの君（きみ）を、毎朝のようにロングエスカレーターで見かけるようになったのだ。

初めて彼を見かけた、初夏のあの朝。

便所サンダルに紺の綿ソックスをコーディネートし、足もとにきりりと清潔感を漂わせていた彼も、ここ数日はウールのソックスで秋らしく暖かさを演出している。
無論、紺の綿ソックス、ウールのソックスのどちらもが、黄土色の便所サンダルにとてもマッチしていることは言うまでもない。

N田町駅のロングエスカレーターに、ピシリと背を伸ばして佇む

『彼』。
いつもはその後ろ姿を見つめつつ、彼の靴下と便所サンダルのコーディネートをチェックしているだけのマヒルだったが。

今朝は違った。
勇気を出してみたのだ。

N田町のエスカレーター。マヒルが見上げると、暖かそうなウールの紺ソックスに包まれた『彼』の足が見えた。
くるぶしをピタリとつけて、膝の裏側はまっすぐに伸びている。
黒いバックパックを背負った背中は微動だにせず、顔はまっすぐに前を見据えていた。

マヒルは、エスカレーター右側を『彼』の方に向って上がっていった。そして『彼』の真後ろの段で立ち止まると、思い切って声をかけた。

「おはようございます」

『彼』はためらいがちに振り返った。　マヒルは、再び言った。

「おはようございます」

「……お早うございます」

『彼』は律儀に、一応挨拶を返した。マヒルは、すかさず続けた。

「いつも見てました」

『彼』は、全国一億数千万人の日本国民全員が理解できるほど明

確に、困惑の表情を浮かべた。
だが、マヒルはそんなことは、まったく動じるつもりはなかった。
「お似合いですね……便所サンダル」
『彼』は絶句している。
「他の色は、お持ちなんですか？」
「……いや」
『彼』はやっとのことで、一言答えた。その声は、ナカナカ渋い低音だった。
「いつも便所サンダルなんですか？」
マヒルはなおも話しかけた。
「……いけませんか？」
「いけないだなんて、そんな。素敵です」
すると『彼』はどういうつもりか、マヒルにこう尋ねた。
「あなたは履かないのですか？　便所サンダル」
まさか質問が返ってくるとは思わなかったマヒルは、返事がすっかりしどろもどろになってしまった。
「あ、え。ひ、冷え性なもので」

「……成程」

ちょうどその時、二人をのせたエスカレーターが改札階に辿り着いた。そして、出勤ラッシュの人の波にのまれるように、マヒル達は自動改札の方へと流されていった。

……今を逃したら、チャンスはもうない。

マヒルは心を決めた。

「お願いがあるんです」

「は？」

『彼』は、今にも改札を抜けようとしたところを呼び止められ、当然のことだが憮然とした。だが、マヒルは、そんなことには構っていられなかった。

「わたし、こういうものですが」

マヒルはすかさず名刺を差し出した。

「『ベンジョサンダル友の会』？」

『彼』は、名刺に目をやりつぶやいた。

「便所サンダル愛好者たる会員による便所サンダル愛好者の発見、便所サンダルの
鑑賞及び利用の奨励並びに便所サンダル業界の振興を目的を有する

団体です。将来的には中間法人化を考えています！」

「……俺にどうしろと」

「会員になっていただきたいのです」

『彼』は、引き続き冷静だった。そして無言だった。

マヒルは、ためらいながらも、さらに続けた。

「あの……『ベンジョサンダリスト一号』とお呼びしても、よろしいでしょうか？」

2

2

マヒルの職場は、体を鍛えるのに最適だ。
いや、これは不正確。

その環境に身体が適応できさえすれば、他のどんな場所でも生存が可能であろうという意味において、そうである。

昭和十一年に完成したその職場の建物は、壮麗で荘厳だ。
パンプスのヒールを取られそうになるほどの分厚い絨毯が敷き詰められた廊下。窓には真紅のビロードのカーテン、金色のタッセル。高い高い天井。
別に『素敵なオフィス自慢』をしているわけではない……。

古いのだ。
それらの何もかもが。

ベルベットのカーテンはといえば、布地が劣化し、ところどころ裂け、埃が染みつき、もはや真紅とは言い難い色に変色している。一枚板の大きなドアは、どの部屋のものも、どこかしらペンキが剥がれ落ちていた。
高い高い天井は、当然のことながら、冷暖房効率を著しく低下させ、灼熱の真夏日は真夏日のごとく、底冷えのする二月の夜はそのごとく。室内温度も上下するのであった。

そして、延べ五万三千平方メートルのこの建物で働けば、一日一万歩のウォーキングなど、軽くクリアできるであろう。

このような過酷な環境に適応した人間に及ぼされる健康上の効果たるや、クンダリーニ・ヨガの修行や、マクロビオティク療法などの比ではない。

その建物とは、国会議事堂である。

マヒルは、その中のH河町寄りの、とある事務室で働いている。どちらかといえば、マヒルの職場におけるステイタスは、『若干、若めの窓際族』である。

古い議事堂の窓際にあるマヒルの席は、夏は日差しに照らされ、冬は隙間風が入るばかりだ。しかも、たとえ二月の網走の平均気温なみに、都内が冷え込んだとしても、暖房というものは、十二月一日の午前八時三十分にならなければ、決して入れられることはない。予算がないからである。

窓際族マヒルの十一月の朝は、身も心も凍るようなのであった。そして、加えて、今朝の出来事は、さらにマヒルの心を凍りつかせた。

「断る」

きっぱり言い放ち、『ベンジョサンダリスト一号』と呼ばれることを拒んだ『彼』は、N田町駅改札を出ると、足早に六番出口へと消えていった。

マヒルはショックのあまり、しばしその場に立ちつくすしかなかった。

職場備え付けの『ネスカフェ・エクセラ詰替お徳用』をすすりながら、マヒルは『彼』のあの冷たい拒絶の言葉を、もう何度も反芻しているのであった。

勇気を出して、声をかけたのに。あの冷たい仕打ち！

もしかして……ナンパだと思われたのかもしれない。

そう思うと、マヒルは底冷えする事務室で震えながらも、顔から火を吹きそうなほど恥ずかしかった。

「ああ。あんなこと、しなければよかった」

そうひとりごちながら、マヒルは、どんどんと後ろ向きな気持ちに陥っていくのだった。

すると、突然、マヒルの心の中の大天使ミカエルが、声を発した。

「いつもそうやって、ちいちゃな失敗にくじけて、あきらめてばかりいるのね？　あなた」

マヒルは、ミカエルの声に耳を傾けた。

「今度も、簡単にあきらめるの？」

「そんな……ミカエル。だって」

マヒルは、心の中の大天使ミカエルに反駁した。だが、ミカエルは、マヒルになおも問いかけた。

「あなたの便所サンダルに対する気持ちって、そんなに容易にあきらめきれるようなものなの？」

「……いいえ、いいえ。あきらめきれないわ、あきらめきれるワケがないわ」

マヒルは、自室の六畳間の天袋に押し込めてある、便所サンダルに思いをはせた。

結婚式で履いたガーターベルトや何やかやと一緒に、天袋の奥の奥に押し込めてある、あの便所サンダル……。

ずっと、ずっと自分だけの便所サンダルがほしいと思っていた。

市民プールの消毒薬くさいお便所で、ちょっぴり湿った黄土色の便所サンダルに足を滑らせるたびに覚えた、あの胸の高鳴り。

自分だけの便所サンダルに油性ペンを滑らせて、『まひる』と名前を書く。

そのときの手ごたえは、きっと、キュキキュキと心地よいはずよ……。

大人になって、あちこちの靴屋を覗いてみたが、黄土色の便所サンダルは見当たらなかった。たまに見かけても、中国、東南アジア製のビーチサンダルに毛が生えたような代物ばかり。

あのしっくりと足になじむ黄土色の便所サンダル……。

きっとあれはメイド・イン・ジャパンに違いないのに。

そして、時は流れ。

『うらぶれた駅前商店街廻り』を趣味とする配偶者を得て、マヒルは電柱にしなびたプラスチック製の繭玉が飾ってあるような、もは

や日本では絶滅の危機にひんしているといってもよいような『真性』のうらぶれた駅前商店街があるＮＫ山駅に新居を構えることとなった。

そこで初めて、マヒルはあることに気が付いたのだった。

そう。

便所サンダルは『靴屋』にはない、ということを……。

便所サンダルは『履物屋』にあるのだ。

新年度始まりの半月間、公立小中学校指定上履きの販売時にだけ、かろうじて存在意義を有しているＮＫ山駅前の履物屋。

そのすすけた木枠の格子模様のショウウインドウに、便所サンダルを見つけた時。

あの喜びを、マヒルは今でもありありと思い出せる。

そのサンダルは、マーブルがかった黄土色。

まごうことなく、夢みたとおりの便所サンダルだったのだ。

くる日もくる日も、まだ売れていないことを横目で確認しながら、履物屋の脇を通り過ぎるマヒル。

その敷居をまたぐ勇気が出ないまま、ひと月が過ぎ、そして、半年が過ぎた。

しかし、そんな日々も、ウインドーから便所サンダルが、忽然と消えたある晩秋の日に、終わりを告げた。

いつもの場所にサンダルがないことに気が付いたマヒルは、我

を忘れ、気がつくと履物屋の中に飛び込んでいたのだった。

「あの、あの、あの。きのうまで表にあったサンダルは……」

店の真ん中で、ビニールくさい履物に埋もれるように座っていたおじさんは、マヒルを振り返りながらこう答えた。

「ああ、もう寒くなってきたからねぇ。展示は長靴と取り替えたんだよ。奥にしまってあるけど」

よかった、よかった……よかった。まだ間に合った！

「サイズは？　S、M、L、LLがあるよ」

おじさんが訊いてくる。

「えっと……。普段は、二十四・五なんですけど」

「うーん、女性ものだとLLかなあ。でも今、LLきらしてるんだよね。男もののMで合うかなあ。そうそう。ちょうど、カワイイ色のがあるんだよ。水色でね」

そういって、店のおじさんは、ビニールに入った水色の便所サンダルを取り出し、マヒルの前に置いた。

水色の便所サンダルは、ぱっと見、劣化してひび割れた樹脂製の滑り台を思わせる質感をしていた。　しっとりと、マーブルに輝く黄土色の便所サンダルを脳裏に思い浮かべながら、マヒルは口をつぐんで、サンダルを見つめた。

「試し履きしてみるかい？」

おじさんはビニールを開けて、水色の便所サンダルを取り出そうとしたが、　マヒルは、無言でそれを制した。

すると、おじさんは、ビニールを開けかけてやめ、さりげなく、それをレジの方へ持っていった。

「やっぱり、こういう『つっかけ』、一足あると便利だよね。色もカワイイでしょう？」

「……はい」

マヒルは、やっとの思いで一言だけ答えた。

「じゃ千円ね。消費税はサービスしとくから、まいどあり」

……わかっていた。

おじさんは、気を使ってくれていたのだと。

妙齢の乙女が便所サンダルを買うのであるから、せめてパステルカラーを薦めるべきだと。

でも……。

どうして、あの時「色違いはないんですか？」の一言が言えなかったのだろう。

せっかく、勇気を振り絞って履物屋に足を踏み入れたというのに。

口惜しさと後悔のあまり、一度も足を入れることなく、天袋の奥に封印してしまった、あの水色の便所サンダル……。

もう、二度とあんな思いはしたくない。

仕事はおろかプライベートも、全くパッとしない、中途半端な三十女のマヒルだけど。

『ベンジョサンダル友の会』。

これだけはやり遂げたい。

やり遂げたら、きっと新しいわたしが始まるはずだわ。

朝靄に煙る議事堂の三角屋根をみつめながら、マヒルは決意した。

「ミカエル。わたし、やるわ」

マヒルはN田町駅ロングエレベータにたたずむ『彼』の後姿を思い返した。

やっぱり、ベンジョサンダリスト一号は、『彼』しかいない……。

なんとしても、入会させなくっちゃ！

3

3

地下鉄H蔵門線N田町駅には、核シェルターがあるという噂が絶えることがない。

その噂は、あまりにも長過ぎるエスカレーターの天井部分に、若干、不自然な空間があることがもとで広まったのではないか、とも言われている。

だが、マヒルは知っていた。

その不自然な空間部分から、毎日、夕方六時半になると、さまざまなお惣菜の匂いが漏れ出ててくるということを。

ある日は肉じゃが。またある時は、おでん。そして、ある日は焼き魚。

そう、その不自然な空間。

おそらく、それは。

『社員食堂』ではないのだろうか？

……いや、社員食堂をかねた核シェルターかもしれないが。

そんなロングエスカレーターに毎朝、微動だにせず、背筋を伸ば

して佇む『彼』。

今朝も見上げると、そこに『彼』のマーブル模様の便所サンダルがあった。

エスカレーター右側を駆け上がり『彼』の真下の段で立ち止まると、マヒルは『彼』に声をかけた。

「おはようございます」

『彼』は振り返りもしない。

「靴下、どこのメーカーのですか？」

マヒルは、ふたたび声をかけた。『彼』は、ゆっくりと振り返ったが、黙ったままだった。

マヒルは定期入れから名刺を取り出し、『彼』に差し出した。

「『ベンジョサンダル友の会』の入会、改めてお考えいただけませんか？」

『彼』は無言のままだった。

「しばらくお考えいただいて、気持ちが決まったら、ここに連絡ください。ね？」

マヒルは、懸命のスマイルで、『彼』に名刺を押し付ける。

学生時代にスマイル０円の店で鍛えたこのつくり笑い、見るがいいわ。

しかし、片手で、しかも、しぶしぶと名刺を受け取った『彼』は、それをぴりーっと、きれいに二枚に剥いだ。

「考えないから」

そういって、『彼』は、マヒルに二枚の紙片を押し戻し、改札を出ると、六番出口の方へ消えていってしまった。

「……わたし、あきらめないわ。ミカエル」

マヒルは着ていたカーディガンにくっついていたご飯粒を剥がし、指で練ってから、二枚に割かれた名刺を張り合わせた。

ちょっと紙がガビガビになってしまったが、仕方があるまい。

『友の会』の名刺は一枚しかないのだ。

「プランB、始動！」

マヒルは、ショルダーバッグから携帯を取り出すと、メールを打ち始めた。

……かちょうへ。きょうはお休みします。

送信ボタンを押すと、マヒルはきびすを返し、ロングエスカレーターを下っていった。

4

4

エスカレーターの手すりに手を伸ばし、足を踏み出そうとしたところで、俺は何かに袖を引かれた。

「オハヨウゴザイマース」

やっぱり……。

俺の視野の端に入ってきたのは、このところ、朝エスカレーターで執拗に声をかけてくる女だった。

歳は、三十代半ばといったところ。

化粧っ気もなく、勤め人なんだか学生なんだか判然としない身なりをしている。

相手にする必要などない。俺は、そのままエスカレーターに足を乗せた。

すると、女も袖を掴んだまま一緒に乗り込んできた。

「あの、『友の会』のことなんですけど」

よれて波打った小汚い名刺を押し付けながら、話しかけてくる。

「……いい加減にしてくれ」

ここまでしつこくされては、さすがに声を荒げたくなった。

俺は、袖を掴んでいる女の腕を振り払った。

だが、女はうすら笑いを浮かべながらカラダをよじると、バスガイドのような身振りで、自分の後ろに立っている男を指し示した。

「こちら『ベンジョサンダリスト三号』でーす。ヨロシクー」

……『三号』？

それは、色白で線の細い男性だった。

三十代前半だろうか。白無地のカッターシャツに、いわゆるドブネズミ色のスーツ。何の特徴もないネクタイ。

顔立ちは、まあ『端整』と言えなくもない、かもしれない。

だが、猫背気味で姿勢は悪く、その前頭部分には、今はまだほんの僅かではあるものの、いずれは本格的に到来するであろう頭髪問題の徴候が、確かに見受けられた。

その疲れた前髪は、男がその年頃の日本の男性にありがちな、過酷で劣悪な労働環境に置かれているであろうことを、如実に物語っていた。

しかし、男の視線が俺の足元に降りた瞬間、その眼に鋭い光が宿ったことを、俺は見逃さなかった。

俺もすかさず、目を動かさずにヤツの足元を観察した。

……その男と俺の間には、それ以上、会話も説明も必要なかった。

「『三号』と言ったな？　『ベンジョサンダル友の会』とやらに入っているのか？」

俺は、女を無視し、その男に直接声をかけた。

「え、あ、ハイ」

痩せた猫背の男は、若干甲高い声で、しかし、素早く返答した。

「あなたも入会してくれますよねっ？」

手前の女が、再び口を挟んでくる。

俺は今一度、『三号』と名乗る男に視線を向けた。

俺たちは一瞬、視線を絡ませ、そして、再びそらした。

三号の瞳の奥にあるものを知るには、それで十分だった。

その直後、エスカレーターが終わった。

俺は次々と降りてくる人の流れを妨げないよう、十歩ほど歩いてから、背後の三号と女を振り返り、そして言った。

「俺も入会しよう」

5

5

おそらく、女の声帯が実際に振動さしていたならば、「きゃぁぁの、きゃぁぁの！」とでもいうような超音波が発されているだろうと想像された。

だが、彼女は、消音したテレビ画面のようにクチだけを動かしながら、隣に立っている三号とハイタッチをして、ぴょんぴょんと、もとい、ドスドスと飛び跳ねた。

もうこの瞬間にも、先ほどの自分の回答に対する後悔の念が、喉元にまでこみ上げて来ていた。

だが、三号は、そんな俺の気持ちを察したかのように、まだ飛び跳ね続けている女を押しとどめると、彼女に何事かを耳打ちした。

すると、女は弾ませていた息を急に抑え、よれた名刺を取り出すなり言った。

「じゃ。一号。『友の会』の定例会議は、隔週水曜日、昼の十二時二十分からだから」

三号が、男にしてはやや甲高い声で、「場所は、国会前庭園のＳ民党側の方ですから」と補足する。

「細かい場所は、ここに書いてあるからね」

女はそう言い添え、まるで、親戚のおばさんが少ない小遣いを甥のポケットに押し込むかのように、喫茶店のレジ前で伝票を奪い合

うおばさんが、友人のバッグに折り畳んだ千円札をねじ込むかのように、俺のスーツの胸ポケットに、そのよれた名刺を押し込んだ。

「『友の会』は、お弁当持参だから。じゃあ、二人とも明日ねー。三号、きょうはありがと。お疲れ様ぁ」

女は、両手をひらひらさせながら、N田町駅の自動改札を出て行った。

唖然としつつ、その姿を見送っていると、三号が俺の肩を人差し指で三回叩いた。

「ということで。明日が定例の水曜日ですから。時間厳守で集合場所にお願いしますよ、一号」

それは隠すべくもない。明らかな役人口調であった。

三号は俺に会釈をして、百八十度方向転換をすると、N田町駅の下りのロングエスカレーターに乗込み、右側を歩いて降りていった。

六番出口の階段を上り、胸ポケットから名刺を取り出す。

地上に出ると途端に臭かった。この季節はいつものことだが、銀杏並木の銀杏が、大量にアスファルトに落ちて潰れていのだ。

斜めから差し込む朝の日差しに顔をしかめながら歩き出し、名刺に眼を落とす。

―ベンジョサンダル友の会　会長　岡野マヒル。

連絡先として、携帯電話の番号が記されていた。

裏面を見ると、サインペンでたどたどしく書かれた地図がある。

議事堂と憲政記念館と国会前庭園と首都高のインターが、これ以上ないほど思いっきり大雑把に配置され、国会前庭園の端っこの方

に、★印が点けてある。
そこには、「集合場所。バグパイパーの横」とメモられていた。
……ばぐぱいぱー？
その時、ちょうどＪ民党の玄関から出てくる議員の黒塗りとかち合い、俺は機動隊に押しとどめられた。
再び名刺の表面を見る。
バグパイパー？　って。
黒塗りが車道に出ていった後も、俺は、しばしの間、警官の後ろ、塀に立てかけてある警杖の脇に立ち止まり、よれた名刺を手に立ち尽くしていた。

6

6

国会前庭園のすずめは、チュンチュクチュと鳴く。

と、マヒルは思う。

マヒルに識別できるトリは、カラスとすずめとハトだ。庭園には、他にも色々トリがいるのだろうなとは思う。だって、ここには色んな種類の樹もあるし。

というか、ちゃんと幹のところに、名札みたいのがつけてあるから解るんだけど。『ソメイヨシノ（バラ科）』とかさ。

まあ、名札なしで識別できる樹といえば、イチョウと桜くらいなんだけどね。

これってたぶん、『幼少のみぎり』からの近眼のせいなんじゃないかと思う。昔から、トリの形も、木の葉っぱもよく見えなかったし。

あ、星座とかも乱視だから良くわかんない。初めて眼鏡をかけて外に出た時、屋根の上に猫が座っているのがハッキリ見えて、びっくりしたんだったよなあ、もお。

てなことを考えつつ、マヒルがコンビニのおにぎり入りのビニール袋をブラブラさせて、集合場所に向かうと、バグパイパー横のベンチには、すでに二号が座っていた。

二号は、ちょうど弁当のタッパーを開けているところだった。

「お、二号。今日も愛妻弁当かね」

マヒルが後ろから覗き込み声をかけると、二号は毎度のことなが

ら思いっきりびびって「うおぅ」とおっさん声を上げる。そして、なぜか慌ててタッパーの蓋を閉めるのであった。

「会長。毎度毎度、普通に登場できないわけ？」

二号の文句を聞き流しながら、マヒルはベンチに腰掛け、コンビニおにぎりのビニールをぺりぺりと剥がす。

「ふつう？　そもそも『普通』とは、なに？」

おにぎりを頬張りつつ、哲学的に二号に絡むマヒル。

ふかし芋しか入っていないアルマイトの弁当箱を蓋で隠して食べる戦時中の疎開児童のような体勢をキープしたまま箸を動かしていた二号は、「普通っていうのは……つまりさ」と真剣に答えを返そうとした。

だが、マヒルは、二個目のおにぎりの海苔を巻きながら、それを遮った。

「……二号」

「なに？」

「……秋だねえ」

どうやら、マヒルにとって『ふつう』については、かなりどうでも良かったらしい。

「このシャケ、ちょっと生ぐさーい」

マヒルは、コンビニおにぎりの具ごときに悪態をつきながら、再度、二号の弁当タッパーを覗き込んだ。

「ねえねぇ。その昆布の佃煮ちょうだい」と言うやいなや手を伸ばし、それを三枚ほど掠め取る。

「あ、それ。シメに食べようと思ってたのに」

二号の嘆きの声を聞きながら食べる昆布の佃煮は、おいしいなあ。マヒルが、そう考えつつ咀嚼していると、バグパイパーの後ろの方に、三号の姿が現れた。

三号の身体中心線は、右八度くらいに傾いているので、遠くからでもすぐ判るのだ。

バグパイパーの前を通る時に前傾姿勢となり、しかも、右腕を顎の前に垂直に出して、「失礼、失礼」とつぶやきつつ、三号はベンチまでやってきた。

そして、二号をはさんでマヒルと反対側に座った。

「おや、今日は二号が作ったんですね、お弁当」

腰掛けるなり二号の弁当を覗き込みむと、三号は言った。

「えー？　そうなんだ。気づかなかったよ。あたし」

「昨日が、保育園の送り迎え当番の日だったからな。今日は弁当の日。カミさんが保育園当番」

二号は、別に聞かれてもいないことまで律儀に回答する。

「中身のつめ方が、奥さんの時よりもキレイなんですよ、二号自作の方が」

三号が若干、得意気に付け足す。

「四角い箱の中には四角く詰まってないと、気持ち悪いからな」

二号はかつて昆布の佃煮があったはずのところに、白ご飯の最後のひと口をなすりつけている。

「うわぁ、二号、あれでしょ？　買い物した時に、店員が詰めてくれたビニールの中身とか、気にくわなくって詰めなおすタイプでしょ、やだねぇ」

おかずを奪っておきながら、さらに、いわれなき批判まで二号に浴びせるマヒルなのであった。

「なんだよ。悪いかよ？」

しかも、二号、否定はしない。

「まあ、子持ち共稼ぎは、なんだかんだいって大変ですよね」

三号がめずらしく、他人を思いやる発言をする。

「でもさあ。文科省は霞ヶ関に唯一自前の保育園持ってるから、いいジャン？」

一方、マヒルは、他人に対する思いやりのかけらすら、持ち合わせていない。

「確かになあ、俺もカミさんも本省勤務だから助かってはいるけどなぁ」

二号もここは一応、謙虚に応じる。

……基本いいヤツなんだよね、二号は。

「あれ？　三号、お昼ごはんは？」

二号の脇から身を乗り出して、マヒルが尋ねた。

「今朝、出勤遅かったから、今はこれで」

三号は手に持った缶コーヒーを持ち上げてみせて答えた。宇宙人が大好きなメーカーのヤツだ。

「夕べも遅かったのか？　『キャリア』は大変だな。何時に帰った？」

弁当タッパーを弁当袋にしまいながら、二号が訊いた。袋には、洗濯で薄くなっているが、マジックペンでひらがなの名前が書いてある。どうやら弁当箱用品は、子供と共同利用らしい。

「今朝、四時前かな。庁舎からタクシーに乗ったのは……」

三号はワザとらしく遠い目をして答えた。

「いいよねー。金融庁さんはタクシーチケット青天井なんでしょ？」

マヒルの辞書には『同情』の文字はないのであろう。

「そういえばさ」

二号が口を挟んだ。

「昨日の朝は悪かったな。N田町駅行けなくて。ほら、保育園の送りだったからさぁ」

「……大丈夫ですよ。『彼』の件なら」

三号が眼鏡を押し上げながら言った。

「今日来てくれるはずですから、絶対に」

国会前庭園にそびえ立つ時計塔の針は、十二時十九分を指していた。

7

7

茱萸坂を下っていると、皇居の方から吹いて来る風の冷たさが身体に心地よい。

とはいっても、首都高出口の周辺に渋滞している自動車の窓が、お堀の水面のようにきらめいているのを見ると、この秋風には一体、どれ程のＮＯｘが含まれているのやらという危惧も生じない訳でもない。

と、俺の左脇をスポーツウェアとキャップで身を固めた男性が、駆け足ですり抜けていった。

昼休み、五十分間の皇居ランニング修了後のランナーズ・ハイと引換えに、どれほどの有害物質を肺に蓄積して帰ってくるのやら……。

早くも汗ばんでいる彼の背中を見やりながら、俺はぼんやりとそんなことを考える。

無論、皇居ランナーには、余計なお世話だろう。

昨日の朝、くだんの女から押し付けられた名刺をポケットから取り出し、また眺める。

何度見ても、要領を得ない地図だ。

これを描いた『マヒル』という人間は、いわゆる『地図が読めない女』というものに違いない。無論、地図読解能力が、性別に左右されているという極端な一般論には、全く賛同できないのだが。

議事堂の端まで坂を降りきって国会前の信号を渡り、左側の庭園

に入る。

……地図の★印。

バグパイパー……。

庭園に入って、最初の木々の茂みを抜けたところに、突然、それは現れた。

「ぶほぉ」というか、「ミュルー」というか。

ともかくその音は、庭園の真下にある、かなり交通量の激しい道路の騒音を圧倒する大きさで、あたり一面に響き渡っていた。

そして、『バグパイパー』以外の何者でもなさそうなものが、そこに実在していた。

洗濯し過ぎてプリントは落ちきったが、黄ばみはもう落ちないほど古びて伸びきった、元はおそらく白であったろうTシャツに、まだらに色落ちしたペパーミント色のジャージズボン。

そんないでたちの男が、額にびっしょりと汗をかき、細く長いパイプが三本突き出した楽器を鳴らしていた。

あれが、バグパイプ。

思ってたより、音も楽器もデカいな……。

軽いショックを覚えながら、俺はバグパイパーを見つめた。

そのすぐ隣にあるベンチに、三人の人間がバグパイプの大音量を物ともせずに、何事かを喋り合っている。

ベンチの真ん中に座っていた男が、ふと顔をこちらに向け、俺を見上げた。

身長はさほどでもなさそうだが、がっしりとした体躯。

「学生時代は柔道部」というような経歴もなくはなさそうな、なかなか立派な腕が肘までまくり上げられたカッターシャツの袖からむきだしになっている。

無造作に組まれた脚。

その足元は『チャンピオン』のテニスソックスに、焦げ茶の便所サンダルだった。

おそらく『松本製作所』……。

俺の物より、ひとつ色が濃いバージョンだ。

その男は、無遠慮に俺の足の先から頭のてっぺんまで眺め回すと、両隣に座っている二人に何か言い、再び俺に視線を戻した。

残りの二人は、昨日会った男女だ。

『マヒル』と『三号』。

ならば……この男。

俺は、そのベンチまで近付き、三人の前に立った。

近づいていく間も、俺から視線を離さなかったその男に、右手を差し出した。

「ということは、あんたが『二号』かな？」

俺の手を握り返すと同時に立ち上がり、そいつは答えた。

「……あんたが『一号』か」

三号はもの言いたげな様子ではあったが、黙ったまま俺たちを見つめていた。
その間、マヒルはというと、コンビニのビニールからコブシ大ほどもあるプリンを取り出してシールを剥がし、それを食っていた。

「まあ、お座んなさいよ、一号」

プリンを食いながら、マヒルは尻を気持ち横にずらし二号との間にごくわずかの隙間を作った。
二号がそこに身体を詰める。三号も、慌てて細い身体をさらに細めて逆側に寄った。
二号と三号の間に新たに作られた隙間に、俺は腰を下ろした。

「はぁい。じゃあ、自己紹介」

マヒルはプリンの匙で三号を指して、「あんたからね」と指図した。

三号が軽く身を乗り出す。
「あ、昨日もお会いしましたが、三号です。年齢は三十四歳、『満』です」

俺はすかさず口を挟んだ。
「ここでは（友の会）、どの辺まで身元を明らかにする必要がある？」

マヒルは、口に含んだプリンの匙をひねりながら、ちらりと俺を見やった。

「別に。言いたくないことは、いわなくても。必須じゃないから、便所サンダルに関する事以外は」

俺は、軽く頷いて三号の方に再び向き直り、視線で続きを促した。

三号は、ためらいながらも、役人口調で続けた。

「入省は大蔵で、平成八年四月。今は金融庁に在籍しております」

今後ともよろしくお願いしますと話を締め、三号は腰を浮かせて無意味に数回会釈をした。

年の割にやたらとおっさん臭い。

続いて、俺の隣の二号が引き取った。

「オレは、文科省在職。高専卒、三種採用だから職歴だけは長いがな。今はシコシコ統計とってる。もう、この部署は十年以上になるかな。ま、よろしく」

そういって、再び俺の手を握ると、「お前さんも『マツモト』か？」と付け足した。

俺は黙って頷き、今度は三号に向かって「『（有）ナカガワ』のようだな？」と問いかけた。

三号は、瞳を輝かせて二、三回激しく頷いた。

そして、その場の全員が、俺に視線を向けた。

ちょっと肩をすくめては見たものの観念して、俺は口を開いた。

「『一号』という事になるのかな」

ということじゃなくて、そうなんですぅ、とマヒルが横やりを入

れてきたが、無視することにして続ける。

「俺は、ずっと『松本製作所』を使ってる。『ナカガワ』の足型だと、幅が細いからな。色もずっとこれだ。交換ペースは、年四、五足程度だ……以上」

「年、四、五足かあ、結構、いいペースですね」

三号が遠慮がちに口を挟んだ。

「ま、そんなもんじゃないか？　オレは最近、夏場の痛みが速いけどな」

二号も話に加わってくる。

すると、三号が「外出時の、アスファルトの熱が要因でしょうか？」と早口で付け足した。

大した意見でもないのに、勿体付けた物言いに聞こえてしまうのは、この男の気の毒な習性のようだ。

三号の『ナカガワ』は、ちょうど俺と二号の中間くらいの茶で、なかなかいい色だ。基本的にナカガワは色使いがふるっている。

だが……。三号のソックスはいただけなかった。

薄手のポリエステルの紺。典型的なオヤジ靴下。

一番酷い、脛毛が透けるほど薄い素材でできていて、膝下まであるようヤツではないだけマシといえば言えないこともないのだが……。

俺は、容器の底に残っているプリンを未練がましくこそげとっているマヒルに眼を向けた。

「さて？」

8

8

マヒルは悔しかった。

ヒジョーにくやしかった。

だが、プリンを食べながら、必死に我慢した。

だって……だって……。

『マツモト』って何？

『（有）ナカガワ』って？

でも、会長として「知らなーい」とは言えない……。

それより。

うちの天袋にしまってある、あの水色の便所サンダルは、一体ドコのなんだろう。

それどころか靴裏に、Ｍａｄｅ　ｉｎ　Ｖｉｅｔｎａｍとか書いてあったらどうしよう……。

買うときは、ドキドキしていて確かめられなかったし。

ああ。一刻も早くおうちに帰って、チェックしなきゃ。

と、一生懸命プリンをこそげていたら、一号が、自己紹介を振ってきたのだ。

ここは、ひとつ威厳を見せないといけないわよね、会長としての。

「諸君！　ご多忙中、集合ご苦労様です。いわずと知れた『ベンジョサンダル友の会』会長、岡野マヒルであります」

そこはかとなく、一同の視線が冷たい気がする。

「昨今の便所サンダルの地位の凋落振りは、目を覆わんばかりの惨状であり、この嘆かわしい現状を打開すべく、わたくし、会長岡野マヒルが便所サンダルの聖地、Ｋヶ関、Ｔノ門、Ｎ田町地区において寄りすぐりに探し集めたこの『ベンジョサンダリスト』の皆さんであります。諸君の今後の健闘に期待するものであります」

え？　なに、沈黙？

「ちょっと。ほら、一号、二号、三号。拍手は？」

……ブッフォー、みゅるるぅ。

佐藤さん（仮）。励ましのバグパイプ、ありがとう。
あたしの味方はあなただけね。

それ引き換え、サンダリスト達ったら、反応薄すぎでしょ？

「終わりか？」
一号がそっけなく口を開いた。

「ところで、以前から聞きたかったんですけど。この会って、ここで弁当食べて、それで一体何するんです？メンバーも一応、そろったみたいだし、何か提示はないんですか？」
三号も生意気なことを言う。

「オレは、まあ、別にどうでもいいけどな。まあ、何かあるなら聞きたい気もするけど」
二号は弁当で腹いっぱいな感じらしく、かなりダレた発言だった。
「も、もちろん、活動についての、いくつかのプランは用意してあってよ。サンダリスト諸君！」
三号が、ちらりと腕時計に目を走らせる。こいつ、ホント感じ悪いわ。
「まずね、『決め台詞』。これをつくりましょ、サンダリストの」
そうよ、これは必須よね？
「嫌ですよ」三号即答するし。
「勘弁して」二号は、腹掻いてるし。
「それは必要か？」一号は、真剣な目でこっちを見ながら言うし。
「だって、もういくつか案ももってきたんだよ」
クリアファイルから、紙を取り出して、サンダリスト達に配布する。
＞決め台詞を作ろう！＜
会長案
1「時代は、便所サンダル！」
2「ジャパニーズ・トラディショナル・クロッグ、ライドオン！」
3「一号、スリップ！　オン！」
「二号、スリップ！　オン！」
「三号、スリップ！　オン！」
ベンジョサンダリスト参上！
「……なぜ、なぜクリアファイルに挟んできたのに、紙の端が、こ

んなにフニャフニャになってるんです？」
三号が手をワナつかせた。
「そうだよな。紙が折れないようにするもんだろ？　普通」
二号も首を捻っている。
「しかも、これは何かの裏紙だな？」
一号は紙をひっくり返して眺めた。
「内部書類のようだが、いいのか？　私用で使って」
「あんたたち！　ちまちまちまちま、ウルサぃなあ、もう」
つか、ちゃんと中を読め。
「三号！　内容が読めれば、別に端っこくらい曲がっててもいいの！　それに、裏紙も有効に利用しないと、資源がもったいないんだよ？　一号！」
「でも、書類の端がうねってるのって、なんか気持ち悪いんだよなあ」
二号、あんたも細かいことにうるさいのね。
「案1は『決め台詞』というより、『キャッチコピー』じゃないか？」
一号が突然、本題に戻した。
「強いて言えば、3が一番決め台詞っぽいかな」
続いて二号もコメントを寄せる。

「案3だけは、言うのイヤですよ。絶対！」

……なんだぁ？　三号。コイツは、さっきから文句ばっかり。

「しかし、もうちょっと、どうかしたのあるんじゃないのか？　何か他にさ」

二号。あんたも基本、拒絶路線かい？

「さして緊急に必要なものとも思えないな。後日、案があれば持って来るということでどうかな？」

ちょっと一号、話まとめに入ってるし。それは『会長』のあたしの役目でしょ？

「そうですね。じゃあそういうことで」

三号、あんた、なに素直に即答してんのよ！

「……だったら、あたしが書いてきたのより、ちゃんといいの、みんな最低一個は作って、次回までに持ってきてよね！」

しょうがない。とりあえず、ここは、これでまとめておこう。だって……。

まだ、議題は残ってるもんね。

「次。友の会の研究テーマを考えてみましたぁ」

二枚目の紙を皆に配布する。

＞「友の会」研究テーマ＜

会長案
1　便所サンダルの足裏の健康サンダル風『イボ』の存在は許容されるか否か
2　中央省庁別便所サンダル普及率
3　地方公共団体別便所サンダル普及率

ぺらりと、紙を見るなり顎の下に手を組み、一号が口を開いた。
「悪いが、1については……」

「既に語り尽くされている」
二号が重々しく告げる。

そこで三号も、激しく頷いた。

「そういうことだ」
一号が組んだ手を解いて、アメリカ人みたいに両手のひらを上に向けて言った。

「そういうこと、って……どういうことよ？」

つまりだ、と一号が続ける。
「便所サンダルの特質における最も重要な点は、足にフィットするフォルムと耐久性。大きく括っていうと費用対効果の問題に尽きる」

一号が自明のことのように言い終えると、今度は三号が引き取った。
「足にフィットするフォルムと健康イボは両立しえない。フィット感が十分でないと、構造上、弱い部分からの劣化が進みやすいですからね」

軽く頷きながら、一号が付け足す。
「例えば、甲をくるむカバーの付け根部分」
「イボが付くと、その分、重量が増すしな」
二号もこう言うと、ちらりと一号に視線を投げた。
「ま、そういうことだ。会長さん」
と、結局、一号が総括した。
……。
……。
わかったわよ、わかったわよ。ああ、そうですかそうですか、メモしとくわよ。

↓「イボ」については、すでにかたりつくされた。

「3の地方自治体普及率ってのは、かなり話がデカいな」
二号がこう言うと、一号が再び顎に片手を当てて紙に視線を落としつぶやいた。
「……2の本省バージョンくらいだったら、おおまかな数は出るかもしれないな」
そして、三号を振り返った。
「例えば。三号、その『ナカガワ』は、いつもどこで買っている？」
「え、これ？」
三号は、大げさに顔を上げて反応した。
「これはですね。庁舎の売店ですよ。他でもうあまり見ないですし

ね、店が開いてる時間に帰宅することもないし」
「オレは組合売店で買うよ。大抵」
二号も横から口をはさむ。
「そうだな。デパートやスーパーでは、なかなか買わないだろう？　だから……」
言いかけた一号の言葉の後を、二号が続けるように言った。
「各庁舎売店での販売実績が、そのまま本省での普及率と考えられる、と言いたいわけだな？　お前さんは」
「でもでも、参議院の共済売店では、ほとんど見たことないけど？　便サン」
ちょっと、もう。あんたら、会長を無視して話進めすぎだっつーの。
「そうかもな。データ上も、国会には、ほとんど卸がないようだからな」
一号は軽く受け流した。
「……国内の便所サンダルメーカーは、現在、東京では墨田区に一カ所、大田区に一カ所工場があるというのは、すでに知っていると思うが」
続けて一号が話し出すと、二号、三号は静かに頷いた。
……そ、そうなの？　なに？　それ自明？
「それぞれの工場から、まず浅草橋の問屋。そして、各地の履物屋

に卸される……」
一号はポケットから黒い手帳を取り出し、ゆっくりとページをめくり出した。
「問屋へ持ち込まれるサンダルの大まかな数値は把握しているんだが……」
一号が言うと、二号は、軽く眼を見開いて一号を見上げ、三号は身を乗り出した。
な、なんなのかしら、一号の、あの『黒革の手帳』。何が書いてあるわけ？
「ただ、その後の販売実数までは追った事がないからな、一度くらい調べてみても面白いかもしれないな」
一号は手帳を閉じ、またポケットにしまった。
そして、マヒルの方を振り返って言った。
「で？　そっちからは、もうこれで終わりか」
「……」
「こちらから、数点、質問があるがいいか？」
「駄目」
とりあえず、拒んでみる。
「まず、隔週水曜日が定例会ということだが？　次回もそういうことか？」
あ、そう？　会長による拒絶を、再び華麗にスルーするわけね、一

号？

「集合場所は、ここなのか？」

「……そう」

「では聞くが、雨天の場合はどうなるのだ？」

「えぇー。っていうか、今まで晴れてたし」
ねえ？　と二号と三号に賛同を求めてみる。

「まだ、これが三回目だからな。会合自体」
二号が状況説明を試みた。

「だいたいね、秋は、晴れるものなのよ！」
そうよ、なんか文句あるわけ？

「しかし、これから、寒くなりますよね。それでもここで弁当食べるんですか？　会長」

三号、お前、ホントうるさい。

「……だったらぁ。『友の会連絡網』を作ればいいじゃん」
さすが会長のあたし。いいアイディアだわ。

「ほう……れんらくもう、とな」
一号が繰り返す。

「そこはかとなくレトロな響きですね」
無意味に腕組みをして三号が言った。

なんかエラそうじゃないよ、三号？　その態度。

「すももの保育園もあるぞ、連絡網。インフルエンザで休園とかさ。そういうので要るだろ？」

二号、なにげに自慢しているのかもしれないが、こどもの名前は「すもも」か？　誰の趣味じゃ？

「はい、ここに。メルアドと連絡先、書いた書いた」

とりあえず手持ちの裏紙を四つにちぎる。

「雨ふったりとか、寒かったりとか、緊急事態発生とかしたら、これで連絡いれるからね！　ほら、一人ずつ、一枚ずつ書いて。はい、まわす」

「一つ、いいか？」

一号が口を開く。

「だーめ」

まったく。会長のやる事に、いちいちうるさいっつうの。

「こんなの、メールでベースで回せばいいじゃないですか？　なんで三回も四回も同じ事、紙に書かなきゃいけないんです？」

三号をはひたすら文句をたれる。

「まあ、まあ。三号。ん？　なんだよ、会長のこのアドレス。長げーな。スパムの送信元かと思ったぜ」

二号も、なにげにひとこと多いし。

一号は、明らかに捨てアドっぽいのと携帯関係。二号は、どっかのケーブルテレビドメインのと携帯の。三号のは携帯のほかは、ｇｏ．ｊｐのアドレスだった。

「みんな、どれを一番チェックしてる？　オレは家のだから、急ぐときは携帯にして」

二号が言うと、一号が「どれも見てる。どれでもいい」と応じた。

「三号。この職場のは、いいのか？」

一号が軽く眉間に皺をよせた。

「まあ、あれだよな。三号なんか、庁舎に住んでるみたいなもんだからな、そこに連絡入れんのが、一番確かかもな、はっはっはー」

さわやかに笑いながらも、二号、結構キツいこと言うじゃないのよ。

「おっと。すまんが、オレはそろそろ」

二号が立ち上がった。

「ウチは時間、厳しいから」

「じゃあ、僕もそろそろと」

三号もコーヒーの空き缶をバグパイパーの後ろにあるゴミ入れに落として、そそくさと二号の後を追っていった。

一号は、今日配った二枚の紙と、連絡網を几帳面に折り畳むと、例の『黒革の手帳』に挟み込み、じゃあ、とだけ言い置くと、議事堂の衆議院側へと歩きはじめた。

あれ？　そういえば、結局。一号ってば、どこに勤めてるわけ？

……一号の後ろ姿って、やっぱ、絶品だよなぁ。姿勢がいいんだよね、背も高いし……。
でも、なんといっても、あの足元だよね！　秀逸なのは。
なんて考えながら、なんとなく後をついて歩いてたら、信号待ちで立ち止まった一号が、突然こっちを振り返った。
「こっちの方向なのか？」
うぅっ……違うんだなぁ。
このまま、一号の後を追っかけてったら、ぐるーり議事堂を一周するハメになる。
「違うけど。あ、ねえねえ。一号。一号の靴下いつもなんか、いい感じだよね？」
「……」
「どこで買ってるの？　どこのブランド」
一号は、突如、冷淡な表情になった。
「靴下のブランドを教えるほど、親しくなった覚えはないがな？」
ちょっと、何なのよ。その、絡みづらーいリアクションはさあ？
「……『親しくなる』ってどういうことよ」
一号は人差し指と親指を顎の下に当てて、ニヒルに口の端を引き上げた。

「まあ、寝てくれってわけじゃない」

はあ？　何コイツ。ちょっとナメてんじゃないよ……。

「いってくれるじゃないの、一号。いいわよぉ。あたし、ちょっと脱ぐとスゴいからね、見て後悔するんじゃないよっ！」

「……悪かった。悪かったから。脱ぐな……見たくないです」

口ほどにもないわね。

一号。いい？　友の会長は、このあたし、岡野マヒルよ！　解ったわね？

「ちょっと、一号。ちゃんと、決め台詞。考えてきてよね！」

逃げるように信号を渡っていく一号の背中に、もう一声浴びせておく。

あ、そうだ。職場戻ったら、『マツモト』と『ナカガワ』のこと、調べなくっちゃ。

9

9

マヒルの部屋の六畳間の天袋の中には、捨てるために目にするのすら避けたいような物と、もったいなくて捨てる踏ん切り付かないけれど、もう二度は使わない物が押し込んである。

前者は、一回使っただけで、ヒースローでぶっ壊された旅行かばんとか。ウエディングドレスを着たこっけいな自分の写真とかだ。後者の代表は、ドレスを着たときにつけていた不可思議な下着の類であった。

……そのどちらでもないけれど。

水色の便所サンダルは、そこにしまってあった。

押入れの中段に足を引っ掛けて、天袋の奥から、手探りで引っ張り出す。同時に裁縫道具箱まで落っこちてきて、あたり一面に古ボタンがぶちまけられる。

水色のベンジョサンダルは、買ったときにオジサンが入れてくれた銀色のビニールに入ったままだった。

値札も剥がさないままで。

しまいっぱなしだったから癒着したり、歪んだりしていないか心配だったけど……。

取り出してみれば、買ったときのまま、キレイなものだった。

すこしためらってから、足を入れてみる。

……一号の言っていた「便所サンダルのクリティカル・ポイントは、フィット感」という言葉が、自然と思い出される。

店で見たときには、劣化した樹脂製の滑り台みたいと思ったけど、いざ足を入れると、ぴったりと足裏に吸い付き、甲の部分はくるみこまれるようだった。

ああ、そうか。

便所サンダルにずっと感じていたトキメキは、このフィット感に対するものだったのかもしれない……。

しかし、それもつかの間。早速、履いていた水色のサンダルをつぶさに調べ始めた。

……あった！

かかとのところに、はっきりと。

Ｍａｄｅ　Ｉｎ　Ｊａｐａｎの文字が。

ほっと一安心なんだけど。

はたしてこのサンダル。

『マツモト』なのか、それとも『ナカガワ』なのか……。

靴裏の部分にＭというサイズ標記と、〇に中の文字。

ナ、ナカガワって、こと？　それとも、全く関係ないのかも……。

かといって、サンダリストたちに聞くのも癪だし。
いやいや。それだけは、ぜったいイヤだぁ。

大体さ、松本製作所も（有）ナカガワも、このご時勢、自社ウェブサイトの１つも作ってない！
ＧｏｏｇｌｅでもＹａｈｏｏ！でも、価格．ｃｏｍでも。
百度まで調べたというのに、名前すら引っかかってこない。
わざわざ、隣の国会図書館にまで見に行った『帝国データバンク会社年鑑』にも、『東商信用録』にもない。

かろうじて、（有）ナカガワは、最新版『タウンページ』の「大田区、履物製造・卸」の欄で、その存在が確かめられたけど。松本製作所に至っては、書庫の中の電電公社時代の電話帳を見せてもらって、初めて名前が出てくる始末……。
番号なんか、〇三の次が三桁だよ、三桁。
こんなんじゃ、その工場の存在自体も危ぶまれるじゃないですか？
とりあえず、番号の頭に三足して、電話かけてみたら、おばさんが「もしもし、松本製作所でございます」って出たから。一応、存在はしているのね。

……でもさ。
なんか、実は便所サンダルの未来って、もしかして想像以上に暗いんじゃない？

押し入れの脇に便所座りをしたマヒルは、両手に便所サンダルを持ち、しばしの間、便所サンダルの将来を憂うのであった。

10

１０

便所サンダル友の会、第四回目の会合の日。

開会に際して、『友の会連絡網』利用の必要はなかった。

清清しい秋晴れ。斜めからさす柔らかな陽差し。

ああ。洗濯物を干してくればよかった……。

と悔やみつつ、コンビニのビニールを振り回しながら、バグパイパーのところにマヒルが到着した時には、一号も二号も三号も、すでにベンチに揃っていた。

二号は弁当の三分の二ほどを、既に空にしており、三号はＴノ門のパン屋『ＳＷＡＮ』のビニール袋から、カレーパンらしきものを少々のぞかせ、ひと口かぶりついたところだった。

一号は、缶コーヒーだけを手にしている。

「サンダリスト諸君、参集、ご苦労であった」

マヒルは、コンビニの袋を持った右手を揚げて、ベンジョサンダリスト達に声をかけた。

「おう」

二号は、顔だけマヒルに向けて短く答えて、直ぐ弁当に戻った。

一号はというと、一瞬目だけマヒルの方を向くと、再び何事かを喋っている三号に視線を戻した。

三号は、会長たるマヒルの「お言葉」を全く無視して、しきりと一

号に話しかけている。

……この三号の会長に対する無礼な態度には、非常に気分を害されるじゃないですか。

そこで、マヒルは、三号と一号の間に、「はっ、どっこいしょ」と尻を割り込ませて、着席してやった。

マヒルは腰を下ろすなりコンビニおにぎりのビニールをめりめり剥がし、取り出した海苔の端をバリっと噛みちぎって言った。

「で、みんな？『しくだい』やってきた？」

三号が眼鏡を人差し指で押し上げながら「決め台詞、ですかぁ？」と、若干、甲高い声で言う。

この声、なんか非常な嘲り感を感じるのは、なぜ？

さらに、三号は、なんと鼻で笑って続けた。

「……あんなものは不要ですよ。ねえ、一号？　二号？」

マヒルのおにぎりに海苔を巻く手が、しばし止まる。

「なんですと……？」

「あ、オレ、一応考えてきたぜ」

二号が食べ終わった弁当タッパーを軽く振りながら言うと、三号は、驚きで声も出せないといった顔で、二号を振り向いた。

「いや、ま、別に。どうでもよかったんだけどな？」

二号が軽くいいわけをしていると、今度は一号が、缶コーヒーを両

手で持ち、両肘をついたポーズで渋くつぶやいた。
「ところで、もうひとつの懸案に関係してなんだが……」
「『もうひとつ』……？」
マヒルが、思わずリピートすると、二号がすかさずフォローする。
「Kヶ関での便所サンダル普及率の話だろ？」
「自分で言っておきながら忘れるんですね？　まったく」
と、横からしゃしゃりでる三号の口調は、どこまでも非難がましい。
「まあ、その数値の件については、もう少し調査時間が必要だが……」
一号は続ける。
「関連して、少々気になることがある……」
一号の口調にただならぬものを感じ、一同はしばし口をつぐんだ。
佐藤さん（仮）のバグパイプが、一声、啼く。
「き、気になることって？　一号」
真っ先に沈黙に耐え切れなくなった三号が、かなり上ずった声で口火を切った。
「一体、何だっていうんだよ？　一号さんよ」」
二号も心なしか表情を硬くしている。
「先週、『マツモト』と『ナカガワ』の工場に立ち寄ったんだが」
一号はポケットから、例の黒皮の手帳を取り出した。

……マツモトとナカガワ、実在してるんだわ。やっぱり。
と、考えながらマヒルも、思わず一号達の気迫に飲み込まれ、固唾を呑んで話の続きに耳を傾けた。
「卸の量が減っているように思えて、ヒアリングに行ったんだ」
一号が手帳をめくりながら続ける。
「なんで、卸の量が減ってるなんて思ったんだよ？　一号」
二号が尋ねると、三号も二、三回大きく頷く。
「街中の小売の動向だ」
一号は手帳から視線を上げて答えた。
「？」
「小売に出回っているサンダルの量が、この数ヶ月で激減しているんだ」
一号が話を続けた。
「減ってるって？　たまにチェックしてるけどよ。宿舎の近所の履物屋でも、これまで通り取り扱ってるようだぜ？」
二号が言う。
「庁舎の売店も、特に、前と変わらなく見えますがね」
三号も付けたした。
「ていうか、一号。お前さん、便所サンダル取扱い店舗、結構見回ってチェックしてんだ？　日常的に」
二号が低く尋ねると、三号が声をさらに裏返らせた。

「すごっ。ひょ、ひょっとして『マツモト・ナカガワ取扱店舗リスト』とか維持してあるんですか？　東京城東部とか、城南地区とか、多摩地区とか……まさかね、ははは」

一号の眉間に深い皺がより、黒皮の手帳を捲る手が、ふと止まる。
三号の乾いた笑いも、その瞬間、止まった。

「気になるのが、今年の七月から九月にかけてだ。本来ならば買替え需要の多い時期だ。例えば、学校の新学期が始まって、教諭や職員はサンダルを新調する傾向があるからな」
一号は、手帳の中の記述をペン先で追いながら続けた。

「そうなると卸としては供給量を増やしても良いはずの時期だというのに。今年上半期までに取扱いのあった小売店舗のうち、五％が、この間に取扱いを停止している」

「……五％も？」
二号が表情を険しくした。

「しかも、取扱い店舗の四十三％が、仕入量を一割から三割程度削減している」
ここまで言うと、一号が手帳を閉じた。
二号、三号の間に重苦しい沈黙が流れた。

マヒルとしては、もはやどこにどう驚いていいのか、よく分からないのではあったが……。

えっと……。

……。

……。

「つまり……それって、どういうこと？」

仮にも、ベンジョサンダル友の会会長であるマヒルのこの問いを、さっくりと無視し二号が言った。

「その五％は、割安感のあるベトナム製なんかの取扱いに流れてるのか？」

三号も問いかけるように一号を見る。

一号は静かに首を振った。

「……いや。東南アジア製品が店頭に増えてきているというデータは、今のところない」

「じゃ、じゃあ？」

三号が、再び、声を裏返らせながら詰め寄る。

「便所サンダル『自体』の店頭販売が減っている印象なんだ。国内外、メーカーを問わずな」

一号が、また眉をひそめた。

「あれだよ、マツモトのオヤジさんが、夏バテかなんかで。ちょっと寝込んでたとかさ？」

深刻さを少しでも紛らわせようとしたのか、二号が努めて明るい口調で言った。

「いや」

すかさず厳しい口調で一号が応じた。

「俺もメーカーの方に何らかの問題が発生して生産が止まってるのかと思って、先週、マツモトとナカガワを訪ねたんだ。だが……」

「……だが？」

マヒルと二号、三号は、身を乗り出した。

「『マツモト』でも『ナカガワ』でも、生産量も問屋に出した量も、特に減らしてないと言うんだ」

「……？」

マヒル、二号、三号全員、まだ一号の話の要点がつかめずにいた。

「つまり……工場からは、通常通りの数量が出荷されているということだ」

「……なっ」

三号が一声上げて、絶句した。

一号がさらに眉間に深い皺をよせながら、シブ―い低音で続けた。

「残念なことだが、近年の便所サンダルの需要は低い。しかし、下げ止まりはとうの昔に迎えている。つまり、言い換えれば、現在の便サンの恒常的な購買層は、本当にコアなところだと言うことだ」

二号がこれまで見せたことのない真剣な表情で頷いて、一号に先を促した。

「だから、今の供給量は、需要とぎりぎりの均衡ということだ。これ以上、小売への商品の流れが滞ったら、それこそ……深刻なサン

ダル不足の事態を招きかねない」

……しんこくな、サンダル不足、とな。

そ、それは、なんか凄く、重大な事態そうな感じだ。

「なるほど。つまり、お前さんが問題としたいのは、卸から小売の間で、製品がどこに消えちまったかってことだ」

二号が納得したようにつぶやくと、一号も顔をあげ、目線で二号に頷いた。

ええっと。ちょっと、ちょと待てい……。

両手を上下に振りながらマヒルが、声をあげた。

「ていうかさ。あのさあ、一号。なんでそんな大事なことを、メールしてくれなかったのよ？　こないだ、せっかく、せっかく連絡網作ったのにさぁ」

「あ、その、連絡網といえばさ。オレ、試しにメール流してみたのよ、先々週。あれからすぐにさ」

二号が突如、いつもの口調に戻っていった。

「でも、会長宛てのだけ、戻ってきちまうんだよなあ？　ホントにこのアドレスあってんのかよ？」

二号が、ミッフィーちゃんもどきのアップリケのついたキルティングの手提げ、いわゆるお弁当バックってやつから、二つに折りたたんだ紙を取り出し、マヒルの方に突き出した。

「なに？　このエクセル表の打出し。行、ほそーい。見にくぅ」

ひとしきり文句をたれてから、マヒルは二号から赤ボールペンを借り受けた。

「あ、ここ。これ。アンダーバーじゃなくって、ハイフンだよぉ」
マヒルが声をあげると、一号が手帳を手に立ち上がり、エクセル表を覗き込んだ。

間違っている箇所に、マヒルが乱暴に赤ペンをいれるのを見ながら、一号も自分の手帳を修正する。

マヒルは、訂正し終わった紙とペンを二号に突き戻した。
二号は受け取った紙を眺めると、ボールペンで頭を掻きながら言った。
「あ、なんだ、ここ顔か……メルアドに顔文字なんか入れるなよな、会長」

「え？　顔文字なんかどこにあります？」
三号が声を上げると、一号もが三号の方に軽くのり出し、自分の手帳を三号の方に差し出した。
一号の肩が三号の首筋にかすかに触れた。
その瞬間、三号の肩が痙攣した。

二号も身をのり出すと、さっき頭を掻いていたボールペンの尻で一号の手帳を叩いた。
「ここ、ここ。ハイフン、アンダーバー、ハイフン」

三号が、それでもまだ腑に落ちないようだったので　一号が、空中に大きく図解してみせる。

そこで、やっと気付いた三号は「ああ！」と声を上げ、ゲンコにし

た右手を左手の手のひらに打ち当てた。
……三号。おそらくこの中で一番、歳若いくせに、どこまでも、ジジくさいヤツだ。
「ともかく。この『供給減』の件については、最優先でチェックする必要があるな」
二号が再び重々しく、一号に問いかけた。
一号は黙って頷き、三号に目をやった。
「協力してくれるか？　三号」
三号は、両手に握りこぶしを作りながら、激しく頷いて同意の意を表明していた。
「忙しいのに、悪いな」
一号は、微かに笑みを浮かべた。
……あら。
なんだかちょっと、かっこいいわね、一号の笑顔。
マヒルは会長の立場を忘れて、若干トキめいてしまった。
一方、微笑みかけられた三号といえば、そこはかとなく頬を赤らめている。
と、三号は、突然、ワザとらしく自分の腕時計と公園の時計と塔の両方を見比べると、もう時間がないので詳細はメールで、とかなんとか言い、急ぎ足で去っていった。
その後姿を一緒に見送っていた二号に、マヒルは問いかけた。

「二号は？　まだ、行かなくていいの？」

「あ？　ああ、今日は保育園の『おゆうぎ発表会』が二時からだから、半休とってるんだ」

「へー、こももちゃんのやつね？」

「すもも、だ」

二号は即座に訂正をかけた。

そこで一号が、「じゃあ」とだけ言い残すと、茱萸坂の方へと歩き出した。

「おい、一号」

二号が去っていく一号の背中に向かって声をかける。

「さっきの小売と卸のデータ。よかったら送ってくれよ。詳しく見てみたいから」

一号は振り返らなかったが、スラックスのポケットに入れていた左手を出し、高く揚げて一度大きく振ると、そのまま歩き去って行った。

マヒルと二号は、公園の出口付近の木々の間に見えなくなるまで、一号の背中を見送った。

そして、マヒルは二号の方を、ちらりと見上げてみた。

二号もマヒルに視線を向けていた。

二人の目と目があった。

「ナニ？　会長」
二号が、ぼそっと尋ねる。
「え、二号こそ、なによ？」と、マヒルも聞き返したが、二号は黙ったまま視線をそらした。
ぶっ　ふぉぉぉぉ　と、バグパイプが断いた。
佐藤さん（仮）は、一体、何時までここで練習しているんだろう。
そして何時から……。
そいでもって、どこの省の人なんだ？
「あのさあ、二号。さっきから、あたし、ちょっと気になってたんだけど」
「おう」
「なんかさあ、三号ってば、さっき、一号にくっつかれた時にぃ」
「おう？」
「なんかさあ。何気に嬉しそうだったっぽくない？」
二号は、なんとも文字表記のしづらいうめき声を発して、しばらく黙り込んだ。
「たしかに……ちょっと顔、赤らんでたよな、あいつ」
「やっぱりぃ？」
マヒルは、二号に向き直ると、両手を顔の前で組んで激しくシェイ

クした。

「お、おい。あんまり深読みすんなよ。別に、特に意味ないかもだし」

二号は慌ててつけたすと、「あ、保育園行かなきゃ」と、これまた、かなりわざとらしく公園の時計塔を見て、立ち上がった。

別れの挨拶もそこそこに、ガニマタの急ぎ足で去っていく二号のデカい背中を悠然と見送り、マヒルは、こうひとりごちた。

「……オトコの勘、っていうのも、あなどれないからねぇ」

そして、自らも踵を返し、憲政記念館の方に歩き出す。

まあ、三号の一号に対する不毛な恋心の有無はともかくとしても……。

マヒルは、観光バスのたまり場であるS民党横の駐車場の前を、修学旅行の小学生をかき分けて歩きながら考えていた。

「それこそ……深刻なサンダル不足の事態を招きかねない」

一号のシブ―い低音が脳裏によみがえる。

便所サンダルメーカーってものが、そもそも日本にふたつっきゃないなんて。それもちょっとした驚きだったけど。

あの、一号の真剣な口調。

しんこくなさんだるぶそく……って、一体どんな感じかしら。

……というか。
事は結構、重大ってことなのよね？　やっぱり。
職場の窓際の席に座り、しばし瞑想にふけるかのように、というよりは、昼食後の居眠りといった風情ではあったが、マヒルは瞼を伏せて考え続けていた。
だが、突如、目をカッと見開くと、メーラーを立ち上げた。
「緊急発動（スクランブル）！　サンダリスト達、指令よ！」
マヒルは『友の会連絡網』、初のメールを打ち始めた。

11

11

「……それで『友の会会合』開催を隔週から毎週にすると？」
一号は涼しく言い放ち、手にしている缶コーヒーに口をつけた。

「そう」
マヒルはプリンのビニールをはがした。

「そうだ一号。ありがとな。サンダルのデータ。結構な年数、累積して取ってたのな、お前さん。あれ、どういう風に処理しようか考えてるところだ」
二号はいつものように、弁当タッパーの蓋で中身を半隠ししながら言った。

「どう処理しようかってっさ、二号。問題が起きてるのは、今年の夏からなんでしょ？　だったらとりあえず、最近のヤツだけ何とか分析とか出来ないわけ？」
プリンの匙を振り回しながら、マヒルは叱咤してみる。

だって……ほらさ。何と言って、便所サンダルの『緊急事態』なのよ？

「会長、簡単に言うけどな。データってのは、大きな流れで見れば見るほど、意味が出る物なんだぜ？　数ヶ月程度だけを取り上げたって、全体から見たら誤差の範囲内って可能性もあるんだ。数値の取り扱いはなあ、慎重であればあるほど……」

「ああ、もういいよ、二号。なんか面倒くさいなあ」
マヒルは、男尊女卑的超横暴なパワハラ上司並の横柄さで、二号の発言を遮った。

あら？　いけないわ、あたし。会長には威厳が必要だけど。横暴で無礼であってはならないわよね？　権力をもった「優秀」な女性が、いけない男性権力者の短所までを真似してしまうという陥りがちな罠にはまってしまいそう……。
ううむ。自重、自重。

「会長、二号はプロですよ？」
三号が宇宙人の好きな缶コーヒーを手に口をはさむ。学級会で失言をした同級生をあざける小学生の口調だ。

ほんっと。腹立つわ、三号。
お前、いつの時代のエリートだよって感じ？　今どき、パブコメの会合とかで、トンデモ場違いな質問をして会を滞らせる一般人に対してだって、もうちょっと礼儀正しい口をきくよ？　出来る官僚は。

「ともかく、二号、引き続き分析を進めておいてくれ」
一号がさっくり総括した。

いや、だからそれは、わたしの役目でね、一号。ああ、もう……。
マヒルは心乱れながらも、黙々とプリンを口に運ぶのであった。

「ああ、粛々とやらせてもらうぜ」
二号が一号にしっかりと請け合うと、三号がそこに割って入る。

「そうそう、僕ですね、庁舎の売店の人とちょっと話してみたんで

すけどね」

一号が三号に頷いて見せると、三号は仔犬っぽく眼を輝かせた。

「えっと、やっぱり。最近、便サンの入荷が減ってる実感あるって言ってました。とりあえず、今は在庫があってしのいでるらしいけど」

一号は黙って耳を傾けている。

「その店はですねぇ。あれなんですよ。他省庁の売店にも支店出してて。『西山履物』ってとこなんですけど」

「お。文科省（ウチ）の売店に入ってるのも、西山さんだよ」

二号は弁当を食べ終えて、タッパーの蓋をはめ込んだ。

「そうそう、だから、かなり全体的な動向として、一号の読み通りな感じなんですよね」

三号は妙に自慢げである。

「……三号、『西山履物』の支店のリストアップ頼めるか？」

一号が黒革の手帳を開きながら言う。三号は、すぐさま甲高い声で返事をした。

な、なんだろう……。

友の会の主導権が、完全に一号の物になりつつあるような。

ま、まあいいのよ。ボスってのは、基本的に人を使って何もしないものなのよね？

うむ。一号はわたしの参謀ってポジションって感じなのよ。

そうよ、だから、ともかく、一言は何かいっとかねばね。

「で、一号、あんたはなにするわけ？」

満を持して一声、発してみたマヒルに、一号は軽く視線を向けはしたが、何も答えなかった。

む、無視かよ……。

一号はコーヒーの空き缶を、バグパイパー佐藤さん（仮）の横のくずかごに入れると、そのまま茱萸坂方向に歩き出した。

「ちょっと、一号！　まだ会は終わってないよ」

マヒルはベンチから腰を上げ、仁王立ちになり、ぴりっと姿勢の良い一号の背中に向って叫んだ。

その音量は、バグパイプの音量にも決してひけをとっていなかったはずだった。

周囲二、三十メートルにいた一号以外の人間全員が、一斉にマヒルを振り返ったほどだったのだから。

しかし、一号はそのまま、振り返りもせず国会前庭園から出て行ってしまった。

……むかつく。

マヒルは、その場のサンダリスト達に八つ当たりすることにした。

「ちょっと、二号も三号も。ほいほい一号の指示に従って。何なのっ？　あんたたちは」

三号は露骨にイヤそうな表情を浮かべて、二号の方を振り向いた。

二号とは言えば、女子のヒステリーなど慣れっこといった風情った。さすが、嫁と子供にいる身は違う。いや、各省庁でも女子率のひときわ高い文部省、三種入庁の長い職歴は、さすが半端じゃないと言うべきか……。

「あのさ、会長。一号を『サンダリスト一号』としてスカウトしたがってたのは、あんたじゃないかよ？　オレたちが、やっこさんに一目おいて、何が悪いわけ？」

二号が飄々と言うと、続いて三号が、やや責めなじるような響きの、あの癇にさわる甲高い声で続けた。

「そうですよ、大体、一号から三号までいるのであれば、一号を筆頭と考えるのが建制順ってものでしょう」

マヒルのおでこが、ぴくりと痙攣した。

「あーっそ？　へー。三号、あんた自分が末席だっつうことは、自覚してるワケね」

二号が口をへの字にする。

意味するところは「三号、ばかだな、お前」であろう。

その時、三号の胸ポケットで携帯が唸った。

続いて、二号の尻ポケットの携帯からも、ちゃちなクラシックの着メロが流れる。

二人が、一様に携帯を開いた。すかさずマヒルが覗き込む。

――今ははっきりとは言えないが、他にも気になる事項あり。調査

を進めておく。もう少し裏を取ってから、詳細を報告する――

「一号からじゃん！　なんなの。そうならさっき、そう言ってくれればいいんじゃん？　しかも、なんで二人にだけメールで……」

携帯画面を覗き込みながら、マヒルは三号の耳元で金切り声を上げた。

と、二号が、マヒルの肩を人差し指で叩いた。

「いやさ、会長にもＣＣされてっけど？　ほら」

と二号が自分の携帯を指さして言った。

三号が非難がましく口を開く。

「そもそも会長。なんで携帯、携帯してないんですか？」

そう、携帯不携帯は、マヒルの得意技であった。

ふう。

と溜息をついて、マヒルは、ふたたびベンチに腰掛けた。

……そう。大物は、あまり怒らないものよ？　自分に言い聞かせながら。

「気になる事って、何ですかね？」

三号がめずらしく低めの声でつぶやいた。

「……ま、時期が来れば、言ってくれるだろう？　一号は」

二号はあっさりとしたものだった。

こういう時の二号ってのは、チームプレーで非常に『良い仕事』をしてるなあと、マヒルは思ったりする。
不安をあおらず、考慮すべき優先順位をつける。
なんか、なんとなく「ああ、そうかな？」と思わせられる説得力もあり……。

「ところで……。会長？　一号って何者なんです？」
三号が、マヒルの思索を、くだんの甲高い声で中断させた。

「何者って……」
マヒルは答えに窮した。

そう……。
一号との運命的な出会い。「友の会」開設への劇的な運命。
その詳細は、サンダリスト達にも未だ語っていなかったのだった。

「うーん。まあ、あれよ。ちょっと今はあれなんだけどさ。まあ、N田町駅で『運命の出会い』っていうの？　まあ、そんな感じでさ」
なんか、いざ話すとなると照れちゃうわね？

「運命的出会いとかは、別に、どうでも」
二号がすかさず口を挟んだ。

「そうですよ、僕が聞きたいのは、一号ってどこの所属の人なんですかってことで」

ああ。それね。うむうむ。それは実は、わたしも気になってたのよ。

「いつも、あれだな。帰りは、衆議院方向に坂を上がってるよな」

二号が冷静にコメントする。

「衆議院？　事務局ですかね。それとも法制局？」

三号が性急に言葉を継いだ。

マヒルは二号と三号の推論を、しばし黙って聞いていたが、やがて、くっくっくっと、月影千草のような笑いをもらして言った。

「甘いわね、二人とも。おききなさい、二号、三号。あんたたちはね、種類は違えど、どうみたって、Kヶ関臭をぷんぷんさせてるわけよ」

「Kヶ関臭ですって？」

三号がさも不服そうに口を挟んできた。

「なんか、加齢臭みたいだな」

二号は頭を掻いている。

「ま、似たようなもんよ」

と、マヒルは言い置いてから続けた。

「ともかく。一号には、それがないの。N田町駅で出ていく出口方向からすると最高裁ってことも考えられるけど、あれは絶対、司法じゃないわ、うん。かといって立法府の匂いもしないのよねぇ」

「立法府の匂いっていうのも、何だよ、それ？」

二号の問いに、マヒルは眉を引き上げた。

「あのね。立法府と便所サンダルっていうのはね。実は、Kヶ関よりは、かなり親和性が薄いの」

話の見えない二号と三号は、ぽかんと口を半開きにしている。
マヒルは、人差し指を立てて、三回舌打ちをしてみせた。
「ほら。役人サイドだって、議員根回しで会館周りする時なんかは、ビシッとして行くでしょ？」
「別に、僕は、いつもビシッとしてますけど」
三号は、不服げである。
「でも、『便所サンダル』は履いて行かないでしょ？」
「まあ……確かに大抵のヤツらはそうだな。でもそれが何だよ？」
二号は、部分的には賛同したが、微妙に歯切れが悪い。
「あのね。院内ってのは、議員を頂点としたヒエラルキーの中心よ？　そして時期により多寡はあれど、常に議員が居るわ。つまり、よほど末端にでもいない限り、便所サンダルで赤絨毯の上は歩けないってこと」
「ああ。それで、この間、一号が『国会にはあまり卸していない』って」
二号が納得する。
「せいぜい、固定的な需要は、衆議院のプールのトイレに置くくらいってとこね」
「え？　衆議院ってプールなんかあるんですか」
三号はとことんまで非難がましい。

「ま、屋外だけど」

三号の文句たれにも大分、免疫のついたマヒルは、一号よろしくさっくりと締めくくってやったのであった。

12

12

昨今、子育て体験中に、いろんなことに目覚める父親というのもめずらしくないと聞く。

オレの中にも、いくつかの新たな才能が確実に開花している、と思う今日この頃だ。

例えば。

すももに絵本を読み聞かせながら、ネットオークションの絶妙な入札タイミングを見計らうとか。すももにメシを食わせながら、カミさんの×××を△△し、かつ、○○するとか……。

おっと失敬。

われながら、凄い能力が開発されてきたなと思って、一度カミさんに自慢したら、「ドラマーは、両手両足ばらばらにつかって演奏できるし、あまつさえ、ドラムボーカルだったら歌まで一緒に歌えるのよ？」と一蹴されてしまった。

もちろん。うちのカミさんがドラムボーカルをやるって訳でもないんだが。

こうやって、休日にエクセルシートを開いていると、休みの日にまで、何も、仕事と同じ様なことやらなくたってと、カミさんには呆れられる。

「よっぽど、数字が好きなのねぇ」
嫌味交じりの声を毎度毎度、背中で聞きながら、オレは考える。
別にそんなに、数字が好きなわけでもない、ましてや、仕事など……。

高専を出て、入省してから、いくつもの部署を異動で回った。
毎日毎日、非常勤職員の辞令に公印をつく仕事もあったし、庁舎の消防訓練の段取りをつけるような仕事もあった。微々たる専門技術を生かせる部署に行くなんてことは、まずないのが役所の人事ってもんだ。

それに……。
別に、専攻にさほどこだわりがあって高専の学科を選んだわけでもなかった。

だが、今の業務とは、意外と馬が合う気がしている。
これは、さっき言ったこととは矛盾はない。
そんなに好きではないが、実は、嫌いでもないというワケだ。
一日の仕事が苦になって仕方がない、なんてことは、それほどはない。

最近思うが、これって勤め人としては、比較的恵まれている境遇なのかもしれない。

ということで、家で表計算ソフト立ち上げるのも、別にそんなに「嫌」ってわけじゃないんだ。

オレは、すももに『ミッフィーうみへいく』を、努めて淡々と読ん

でやりながら、エクセルシートを開いて、一号から貰ったデータの入力を進めていた。

多分、まだすももには、まるで絵本というものの意味が分かってない。しかし、読んでやっていると、しばらくの間は、何らかの興味を示す。

続いて『ミッフィーのまるさんかくしかく』にと本を替える。

そして、突然、オレは気がついた。

……そうか。

すべて、つじつまは合うじゃないか……。

オレの絵本の朗読を聞きながら、絵本をなめたり叩いたりするのにも飽きたすももは、ＰＣのケーブルをかじり始めていた。

ケーブルからすももを引き離しながら、入力データに数式を掛け合わせ、再度、それを確認したオレはプリントボタンをクリックする。

背中に汗が一筋伝うのを感じた。

「ヤバいな、急いで一号達に知らせないと」

オレは、片手ですももを抱え、もう一方の手で椅子からジャンパーを取って、台所の椅子に座って雑誌をめくっていたカミさんに声をかけた。

「すまん、聡子。オレちょっと、出てくる」

すももをダイニングテーブルに置くと、オレは返事も聞かずに玄関

へと向かった。

「ちょ、ちょっと、何よ、いきなり」

あわてて雑誌を置き、すももを抱きかかえたカミさんが後を追いかけてくる。

そして、玄関のたたきのところで、オレのジャンパーの襟首を掴んだ。

「駄目よ！　今日は、あなたがすももの面倒をみる番じゃない」

「すまん、来週と再来週、続けてみるから」

オレは、サンダルに足を入れながら答える。

「さ来週は、宿舎の大掃除に出てもらう約束でしょ？」

カミさんはジャンパーを掴んだ手に、さらに力を込めた。

「一体どうしたっていうの？　どこ行くのよ」

カミさんは、まだオレの襟首から手を離さない。オレは振り返り、その手首をつかんでジャンパーから引き離した。

「とにかく、急ぐんだ。今日は何時になるかわからない……勘弁してくれ」

オレの気迫に推されてか、カミさんは、両手ですももを抱き直し、不本意そうな顔をしながらも頷いた。

そして、オレが玄関を開けた瞬間、カミさんは再び口を開いた。

「あ。そうだ。帰りにベビーフード買ってきて」

「……え」

「何時になってもかまわないから」

「お、おう。わかった、なんだっけか？　食いつきのいい銘柄は」
オレはとにかく急いで答えた。

「キューピーのだけど……『食いつき』って、そんな。あなた、犬猫じゃないんだから」
カミさんは、文句をたれながらも、とりあえずその場は引き下がる。

オレも、「アカンボなんて、まだ、犬猫と似たようなもんだろ？」
という言葉は飲み込んで、表に飛び出した。

古臭いスチール製の玄関ドアが閉まった瞬間、すももが短く叫び声をあげた。
それ聞きながら、急ぎ足で、だがなるべく音がしないように、官舎の階段を駆け下りる。

駅へと走りながらポケットの中に手を突っ込み、携帯をつかんで、そのままの状態で一号と三号と会長にメールを打ち、これぞまさに『ブラインドタッチ』と独り悦にいる。
速さと正確さ。そんじょそこいらの、小娘たちには負けてないって、絶対。自信はある。

＊＊＊＊＊

「土曜の午後っつうのに。会合の場所って、やっぱここなわけだ？」

オレは何となく腑に落ちないような心持ちであった。

いつもの友の会会合は、秋の日差しの中とは言え、昼間で明るい国会前庭園だったが、今は、もうすっかりメランコリックな夕暮れであった。

「二号からメールもらった時、僕、庁舎に居たんで……ここが一番都合よかったんで」

三号が口をとがらせながら言った。

想定はしていたが。土曜は基本、『出』なんだな？　三号よ……。

「だって、ここなら定期でこれるしぃ」

そ、そうきたか。会長。

……おや？

「あれぇ、一号がまだじゃん」

会長が口をとがらせて言うと、三号がすかさず口を挟む。

「さっき、僕に電話がありました。少し遅れるって」

おやおや、微妙に得意気じゃないか、三号のヤツ？　それにしても、三号の前髪。いつもに増してまだらっぽさを増してるな……。

なんてオレが思ってたら、会長がやり返しやがった。

「単に、電車乗らないでここまで来れるのが、三号だけだったからでしょ？　電車じゃなきゃ絶対つながるし。どうせ出勤してるに決まってるからね」

土曜出勤デフォルトでこき使われてる三号の、ささやかな喜び奪う

ことねえだろうよ、会長。とことん意地の悪いことを。
……まあ、一号から直電が入るのが、三号の喜びなのかっていうと。
まあ、そうなんだろうな……。

「遅れてすまない」

おっと。
一号がいい感じに登場しやがった。
白シャツにスラックス、ウールソックスにマツモトの『ろの一〇三』(ヒトマルサン)。
いつもと同じで、ただネクタイがないだけだ。
オレはTシャツの上に、大昔、初任給で買った革ジャンとジーンズ。
そして、一号と同番のマツモト色違い。
三号は、まあ……登庁してたわけだから、いつもと一緒のドブネズミスーツにネクタイとナカガワだ。

「二号。報せたいことって？」
一号が早速に切り出してくる。

オレは出がけに急いで打ち出してきたデータを見せた。

「卸から小売へのサンダルの流れを精査してみたんだが。確かに、この夏以降、小売に卸されてる数量は激減してる。だが、この傾向、実は、一年半前からあったとも言えるんだ。ほら、ここ」

そして、オレは表を指し示した。

「この数ヶ月後、マツモトもナカガワも出荷を増量してる。多分、市場の品薄感が伝わったんだろう。だが、この増産分は、まったく市場に出回ってない。一定量がどこかに消えてるんだ」

「どこかが、まとまった量欲しくて、直販して貰ってるとか」

三号が眼鏡を押し上げながら言った。

「まとまって？　なに。どこかに大規模市営プールでもできたっけ？」

……この際、三号と会長のコメントはスルーさせて貰おう。

「……一年半前か、認識していなかった」

一号のつぶやきに頷きで応じ、オレは続けた。

「一号が気付かないのも、実は無理ない。この頃は、今ほど大量じゃなかったんだ。市場から消える量が」

「なるほど、当時は全体のほぼ一割強といったところか。品不足になるほどではないが、小売に取っては、微妙な品薄感があったかもしれないが」

一号は、グラフに目を落としながら言った。

「ねえ。とりあえずさ。座ったら？　一号、二号、三号」

会長は数字を見るのに飽きたのか、さっさといつものベンチに腰を下ろしていた。

「この半年。凄い勢いで中抜きが始まってる……。このままのペースで進むと……」

「……進むと？」
三号が問いかけた。
「おととしの下半期と比較しても、ナカガワとマツモトの持っている便所サンダルシェアの六、七割近くが、どっかに消えるってことになる」
「ナカガワとマツモトのシェアって事は……」
三号が噛みしめるようにつぶやく。
「『便所サンダルのシェア』とほぼ同義だ」
一号がきっぱりと付け足した。
深刻な事態に、重苦しい沈黙が流れる……。
だが、突然、会長がいつもの素っ頓狂な声を上げた。
「ねえねえ。サンダルを何に使うかはともかくさ。その買い占めのお金ってどうしてるのかね？」
「はぁっ？」
三号が、小馬鹿にしたような声を上げた。
まあ、コイツもホント。人を見て小馬鹿にするか丁寧にするかどうかを決めるヤツだよなあ。
役人も十年近くやってれば、こうなっちまうヤツが多いけどさ。
「確かに、メーカーサイドが何も気付いてないってことは、きちんと支払いをして物を抜いてるんだろうから、それなりに資金は要るだろうが……」

こういうと一号は、人差し指と親指で顎を挟むようにしてうつむいた。

「でしょ？　ねえねえ。三号、あんた銀行関係とかって顔きくんでしょ？　元『ＭＯＦ担』の知り合いとかいないの？」
会長が口をはさんだ。

ＭＯＦ担……。
クソ懐かしい響きだなあ。

「ちょ、ちょっと。会長。僕はね。大蔵ってったって、そういう時代じゃないですからね。知りませんよ、そんな連中とか、ノーパンしゃぶしゃぶとか」

三号。別に、会長はまだ、ノーパンしゃぶしゃぶの話はしてないだろうよ？

「というかさ。この数量のサンダルを買い占めるのに、それほど凄い銀行融資とか必要な金額は要らんよな」
オレは話を元に戻した。

「それほどって？」
会長がベンチから立ち上がる。

「そうだな……日本製の便所サンダルは、製造原価がそれなりにはかっかっているが、とはいえ、せいぜい一足数百円。残念ながら便所サンダルの市場規模はさほどのものではないから。これだけ買い占めたとしても、年に七桁から八桁あれば事足りる」
一号が淡々と説明した。

「ななけたか、はっけた……」
つぶやく会長。おそらく、まだ金額がぴんと来ていないんだろう。
貯金額とか、ホント少なそうだな、この女……。

「で、どうする？」
オレは一号に問いかけた。

「そうだな……。とにかく、この中抜きだか、買占めだかに関与している団体または人物の特定だな。おそらく、一年半前からこれに関わっているのが、不特定多数いるということはないだろう」
まあ、確かに。卸からチョクにサンダル買ってる連中がそんなに何組もいるってことは、あまり考えられん。

「意外とぉ、海外とかにサンダルファンがいて、色んな国の人が買ってるのかもよぉ？」
また、素っ頓狂に会長が、口を出してきた。

……まあ、確かに。それも可能性としてはもちろん、ないとはいえないだろうが。

「そうだとしても、調べれば分かるだろう。三号、卸の方の取引を追えるか？」
一号が短く指示を出す。

「まあ、経産に友人はいますが。手を借りなくても、多分そのくらいのことなら」
三号は、人差指で眼鏡を押し上げながら答えた。

「それと、二号」

おっと、オレかい？

「三号の調査結果の分析の方、引き続き頼めるか？」

「おう。構わないが、でも三号の作業の方が大変にならないか？」

オレが一応、三号を気遣うと、三号は「別に、これくらい。電話を何本かかければ分かることですから」と言い放った。

微妙に嫌味ったらしい気もするが、まあ、気にするまい。

「忙しいところ、悪いな三号。今日も『出』だったんだろう？」

一号が涼しい笑顔で微笑むと、三号はかなり露骨に頬を赤らめやがった。

……やっぱ、コイツ？

いや、やはりもう、詮索はするまい。うん。

なんか、会長に毒されたかな、オレも。

「俺は、引き続きメーカーサイドを当たってみる。じゃあ、今日はこれで。適宜、メールで報告を入れてくれ」

一号がシメると、オレ達は人影のない国会前庭園を、それぞれの方向に向って歩き始めた。

会長が、「ちょっとあたしの意見は聞かないわけぇ？」とか、「コイツら無視かよ」とか文句をたれているが、誰も気にしていないようだ。

オレが、振り返ってみると、会長はベンチの上に立って、息をおもいっきり吸い込んでいる。

そして、「水曜日、定例会だからねぇー」と、バグパイプにも負けないであろうと思われる声量で叫んだ。

オレ以外の誰も会長を振り返らなかった。

だが、一号は、フェイドアウトの直前に、背を向けたままではあったが、片手を高く揚げ、一度大きく振って見せた。

会長への返事のようでもあった。

……なんだよ。

ちょっとカッコつけすぎじゃないか？　一号さんよ。

オレは思わず、苦笑いを浮かべた。

13

13

タックスペイヤーに一言いいたい。

お前ら、国Ｉを馬鹿にしてないか？
無責任な公務員、オイシイ思いに、利権まみれ、そう言うが。
そう言うが、
本当にお前ら、本当にお前ら、若手・中堅キャリア公務員やりたいか？

恒常的に夜十一時前には、絶対帰れないレベルの業務量。
その上、メンヘラ上司からは、砂つぶを数えるがごとき無駄な仕事を言いつけられて。やっと明け方、官舎に帰る。

帰ったところで、布団を敷いて眠ったりしたら、夕方ぐらいまで起きられないに決まってる。だから毛布をかぶって、壁にもたれてしゃがんで仮眠だ。

公務員宿舎、格安で立地最高。けしからん。
そう言うよな、お前ら、よくそう言うがな。

そうさ、最寄駅はＳ軒茶屋、月家賃一万七千五百円さ、破格さ。

だがな、築四十年、老朽化して、水回りボロボロ。畳は波打ってるぞ。
しかも、風呂、便所共用。

今時、風呂、便所共用だぞ。デビューしたてのお笑い芸人かよ？
あり得るか？

しかも、錆び付いたバランス釜で、個人宅にあるような小さい湯船には青藻が浮いている。
そうだよ。入居者の誰も、掃除する暇なんて、あるヤツいないからな。

なぜだか知らんが、割れたガラスが散乱していて裸足では入れない風呂場だ。

しかもシャワーは、水しか出ない。

その水しか出ないシャワーを、明け方、帰宅して使うんだ、二月の早朝でも、歯を食いしばって浴びるんだ。

それでも、それでも、本当に、若手・中堅キャリア公務員が羨ましいか？

T急D園都市線？
は？　そんなもの、使った事ないぞ。
電車が走っている時間に帰る事などないぞ。

たまの休みは、寝て、起きたら、もう日曜洋画劇場の時間だ。

そうさ、自分の時間を持つなんておろか、生命を維持する事すら危ういさ。当然、彼女なんかいない。
いや、絶対に出来ない。できようもない。

上司、親戚が見合いを準備してくれなきゃ、結婚などできる訳もな

い。
大学時代に遊んでなけりゃ、場合によっちゃ、結婚まで童貞だ。素人童貞を含めれば、おそらく三十五歳以下の全男性キャリアでは、童貞は七割を越えるだろう、間違いない。

見合い。
それだって、誰にでも来る訳じゃない。
見合いが来なかったら、どうなるか、見合いが来なかったらどうするのか。

敢えて、もう一度聞こう。

それでも、それでもまだ、国家公務員を羨むか？
公務員を蔑むか？

どうなんだ、そこの所をはっきりさせようじゃないか、そこの所をじっくり語ろうじゃないか？

やっとご褒美の留学に出されて、アメリカくんだりでＭＢＡまで取ってきて。
また、こんな生活に、戻りたいと思うか？　そりゃあ、辞めるだろ？　普通辞めるだろ？
曲がりなりにもな、東大とか出ててさ。

転職するだろ？　メリルリンチとか、ＪＰモルガンとか。無理もないだろ？

同じ忙しいにしたって、夜は、六本木ヒルズでシャンパンだよ。
年末は、ミッドタウンでカウントダウンだよ。
クリスマスは広尾の上司宅でホームパーティーだよ。年収八桁だよ。

役所辞めなかっただけ、褒めて欲しいよ。
すでにその時点で、日本国民に真の忠誠を誓っているさ。

あり得ない位偉い、僕は本当に偉いよ。偉すぎる。
誰も褒めてくれないが、誰も褒めてくれなくても自分で自分を褒めてあげたいさ。

分かったか。
文句あるヤツは、ＵＲ賃貸新築抽選にでも、インターネットで申し込んでろ。
僕のいいたい事はそれだけだ。

怒りのあまりに、口調が吉野屋になってしまった。
懐かしすぎるな。最近は、２ちゃんすら見る暇もない。

おっと。今晩の洋画劇場は、『ブロークンアロー』か？

ここ数年、僕にとって洋画封切りがこの番組って感じだ。とりあえず、今日最初の飯を食べよう。ちょっとコンビニいってくる。

コンビニ行って、弁当食ってビール飲めば、あっという間に月曜になる。

月曜だけは、課内は割と朝早くから人が揃う。もちろん、以後は段々に出勤時間が遅れてくる。
なぜなら。夜が帰れないからだ。

土曜に、一号から頼まれた件。

問屋の取引詳細。

早く調べて、一号に報告したい……。

本来なら、こういったことで動くのは火曜以降がベストだ。
月曜は、問屋も銀行もどこだって、仕事の回し始めで、ばたつく。
そんな時に色々聞き回っても、向こうの対応はあまり良くない、やり方として上手くないし、筋も悪い。

火曜の十時過ぎあたり、同僚もまだあまり来てないし、課長もいないはずだ。
そう、動くなら火曜の十時、それがベストだ。

だが……。
出来るだけ早く情報を得たい。
そして、一号に報告したい。
せめて、定例の水曜昼には、間に合わせたい。
だったら、火曜の朝ではちょっと心許ない。
……いや、焦るな、三号。急いては事をし損ずる。

それにしても……。
N田町駅というのは。盲点だったよな……。

そう、便所サンダルと言えば、Tノ門、Kヶ関。それが聖地だ。

それが……。
初めて一号に会った時……。
そう。あのN田町駅のロングエスカレーターで。

あの時、すぐさま互いに足下をチェックしあった。

あたかも、切り結ぶ前の剣豪か何かのように。

マツモトとナカガワの足型の違いを解し、小売のデータチェックまで怠らない男。

何故だろう、こんなにも魅かれる、強く魅かれる。

何よりも、便所サンダルがあれほど似合う男を、僕はいままで見たことがなかった。

そして、どこかしら謎めいていて……。

謎……？

そうだ、そう言えば。

一号って何やってる男なんだっけ？

14

14

「ところでさ、今日の定例会、何で時間変更したんだ？」
二号は、偽ミッフィーのついたキルティングバッグから、タッパーを取り出す。

「なんか、会長がどうしても早めに戻らないといけないらしくて」
三号は今日も宇宙人の好きな缶コーヒーを手にしている。

「へえ。めずらしいな。どうみたって、仕事暇な人間だろ、あの会長。それにまだ、国会も始まってないのに」
二号は、さくさくと弁当を攻略しつつ言った。

一号は今日は手ぶらで、二号と三号が座っているいつものベンチの前に立っていた。
いつもながら、背筋をぴりっと伸ばしている。

「三号、例の情報ありがとう。忙しいのに悪かったな」
一号が礼を言うと、二号は一号を見上げて「別に……そんな」と微妙に口ごもった。

ブッフォー、みゅるー。

もう、晩秋いや、初冬と言ってよいこの頃。
風は冷たさを増していた。
サンダリスト達は、一様に上着を羽織っていたが、佐藤さん（仮）だけは、あの微妙に黄ばんだTシャツ一丁、まだらのペパーミント

色のジャージを穿き、汗びっしょりでバグパイプを吹いている。
そこへ、マヒルがあらわれた。
「ごめーん。本日は十五分ほど開会を早めさせてもらうよ、サンダリスト諸君」
マヒルはもこもこと、もうダウンジャケットなぞを着込んでいる。
「なんか寒いよね―」
マヒルは、ベンチにどっこらしょと腰掛け、早速にコンビニの袋からおにぎりを取り出した。
「三号からの報告は、各自、すでに目を通してるな？」
立っている一号が、すぐさま話を切り出した。
「うん、あれでしょ。問屋でサンダル買い占めてるのって、決まった会社なんだよね」
マヒルはとりあえず、昼食を食べるのに専念し、一号のしきりに、むかっ腹を立てるのは、後回しにすることにしたらしい。
「それも、タイの会社の日本法人なんですよ」
三号がすかさず補足する。
「外資の日本法人で元会社がタイって、なんか凄いめずらしいよな、逆ならありがちだけど」
二号は相変わらず蓋で弁当を半隠しにしつつ、食べ進めている。
「それって本社どこなの？　バンコクとか？」
マヒルが口を挟むと、三号が何やらメモを取り出した。

「いえ、チョンブリ県アマタナコン工業団地、だそうです」
「……あっちょんぶりけん？」マヒルが思わず、両手を頬にあてた。
「会長。結構古典的だな、おい」
そんなツッコミ入れられる二号、あんたも相当、歳でしょうがと思ったが、マヒルはあえて口には出さないことにした。
「会社の名前は『サカキ・インターナショナル』か。これも、なんかタイ進出した日本企業っぽいよな」
二号は、わざわざ打ち出してきたらしい三号のメールを眺めている。
「ねえねえ。そこ、何やってる会社？」
マヒルは指に付いたご飯粒を取って口に運んだ。
「だから、樹脂加工業って。書いてあったでしょう、メールに」
三号がうっとおしそうに言い捨てる。
「だから、『じゅしかこう』ってったって、具体的に何するのよ」
「そんなこと、僕が知るわけないでしょう！」
「ていうか、そもそも三号、お前こんな私用メール、職場のアドレスから送っていいのか？」
二号が口を挟んだ。
「サカキ……」
一号が人差し指と親指を顎の下にあて、俯いてつぶやいた。

「どうかしたの、一号？」
マヒルがプリンのビニールをメリッとはがしながら尋ねる。
コーヒーにスジャータ、食後にプリン、これ基本だ。

「一号？　大丈夫ですか？」
三号が宇宙人の缶コーヒーを両手で握りしめながら、心配そうに声をかけた。

「いや、ちょっとその名前に聞き覚えが……。それに関してはこっちで調べよう。それで三号」

「はいっ」
三号はとても良いお返事だ。
しかも、眼鏡の奥の瞳がきらきらしているようにも見受けられた。

「経産に知り合いがいるとか言ってたな？　ＪＥＴＲＯにも顔が利くか？」
一号の問いに三号は、「もちろん」と即答した。

「では、頼みたいことがある。それと……日曜なんだが、午後は時間空くか？　日曜も一日仕事なのか？」

一号のこの言葉に、三号はすかさず激しく首を振った。
「あ、別に一日くらい何とかなりますから、全然。昼過ぎなら、全然」

三号の返事に、一号は、シブかっこいい笑顔で頷いてみせた。

三号の頬が、そこはかとなく紅に染まる。

おや、まあ？
ベンチのマヒルは、肘で二号の脇腹をつついてみた。
感触からいって、二号のメタボ度は、存外低めのようだ。というか硬い。
お？　これ筋肉？

「あ、ヤバい戻らなきゃ。ごめん。じゃ。あとはメールで報せて」
ふと時計台目をやったマヒルは、いきなりベンチから立ち上がると、ゴミを入れたコンビニのビニールをしっかりと手に持って、憲政記念館の方向へと駆けだしていった。

その走りっぷりには、サンダリスト達全員、ドスドスドス……との効果音を頭の中でつけずにはおれなかった。
別に、マヒルが肥満体であると言うわけではない。まあ、そこまで肥ってはいない。
ただ、「標準」とか「痩せ」とかではなかった。断じてなかった。

陽射しの明るさとは裏腹に、冬っぽい透明な乾いた寒さが感じられる空気の中、サンダリスト三人は、バグパイパーの横になんとなくとり残された感じになった。

「なあ、一号。お前と三号にばかり、色々やらせちまってないか？
　悪いな」

二号が申し訳ながると、一号は軽く首を振った。

「家族持ちには、週末は、色々予定があるだろうからな」

……ってことは、お前さんは独りもんか？　と二号は心の中でひと

りごちた。

「ところで二号、三号？　二人は一体どうやって、この『サンダリスト友の会』とやらの会員になったんだ？」

「あれ、なにも聞いてないんですか、会長から？」

三号が甲高い声を、更に裏返して言った。

「ああ」

一号の方は、渋々の低音である。

二号と三号は、しばし黙り込んだ。そして、両者顔を見合わせて微笑んだ。

やがて、二号が口を開いた。

「なあ、三号、オレたちにも秘密ってもんがあってもいいよな」

「……そうですね」

三号もただちに同意した。

一号は、苦笑いを浮かべた。

「オレたちもって、何だ？」

「だって……ねえ。二号？」

三号が内緒話をする女子高生の風情で、二号に話を振った。

「一号、お前さんのこと、オレたち全然知らないぜ。何やってる？とかさ」

「会長は、一号にはKヶ関臭も立法府の匂いもしないって言ってま

したけどね」
三号が口を挟む。

一号は、それは興味深いねとでもいうような表情を浮かべて、無言で二号の話の続きを促す。
だが、二号は、「……ま。いいけどな。便所サンダル以外のことは、別に詮索しないし、必要ないから」と、それ以上の追及は手控えた。

すると、また一号が口を開いた。
「Kヶ関は、まだまだ高いんだろう？　便所サンダル装着率」

「まあ。民間とくらべればな。ただ、減ってはきてる」
二号が割と真面目に答えた。

「今後は団塊世代の大量退職で、さらなる減少も予想されますしね」
三号が、ねちっと理屈を補足する。

「そうか……」
一号は低くつぶやいた。

「庁舎内だけならまだしも、通勤時にまで便所サンダル派っていうのは、Tノ門界隈でもまず見かけなくなりましたねぇ」
三号が、天下国家を憂わんばかりの口ぶりになる。

「ああ、確かに」
二号が短く同意すると、一号が重ねて尋ねた。

「いつから、便所サンダルなんだ？」

二号が軽く首をかしげて見せた。

「オレは……大学時代からかな。寮でずっとサンダルでさ。共用箇所とかあちこち出入りするし、脱ぎ履きが楽でね。水にも強いだろ？　もう、いちいち色々履き替える必要ないな、ってある日気がついちまったのさ。三号、お前は？」

「僕は……正直、入省してからなんです。僕が入った頃は、まだ大蔵で。組織デカかったじゃないですか。だから、部署によって温度差はありましたねぇ。主計局系のエリート中のエリート然とした連中は、便サンなんて見向きもしませんし。計算部隊は、大体、便サンでしたね。僕の入省当時は」

「あ、大蔵でもいってたんだ？　便サン」

二号がちょっと嬉しそうに声を上げた。

「Kヶ関はどこでも言うんじゃないですか？　便サン。オーソドックスな略ですよね」

「外務省以外はな？」

二号が言うと、三号が乾いた声で笑った。

「……で？」

一号は三号の話の続きを促した。

「まあ、僕は一応I種入省だったんですけど、最初は金融局に配属されて……地味な割には、色々面倒な部署なんですけど。まあ、住専の頃を知らないだけましって、よく先輩連中には言われましたけどね。そうなると、やっぱり便サンじゃなきゃ、やってられないわけなんですよ。最初は僕も、革靴で頑張ってました。当時の直属の上司は、主計からのドロップアウト組でしたし。分かるでしょう？　すごく便サン軽蔑する感じ。かりにもお前ら木っ端役人じゃない

んだから、とかって言って……」

ふと言いよどんだ三号を励ますように、二号がゆっくり頷いた。

三号は二号の頷きに応えて、話を続けた。

「その上司、課長でしたけどね。ほら、ミドルエイジ・クライシスってやつ？　なんか躁鬱入ってて。もう、無茶苦茶なわけなんですよ、指示とか。夜九時過ぎてからの凶暴度は、半端なくて……。午後中かけて作った予算委員会関係資料とか。突然、『この項目、全部不要。明日までに、こっちの項目』とか。いきなりですよ？　で、夜十二時時ごろ出来上がって出すと、また、言うこと変わるんです。やっぱり三年分じゃなくて五年分のデータ揃えろとか。最終的に、翌朝用意できた資料、全部お蔵入りになったりなんて、しょっちゅうでした」

「ふうん。オレも色々耳にするけど、そこまでメンヘルがヤバいヤツも珍しいな。つうか、まず、仕事止まって、問題が表面化するだろうよ？」

二号が尋ねると、三号は苦い顔で首をひねって見せた。

「それがですねぇ。最初は、上も全く気づかなかったんですよ。昔から仕事が緻密な人で。課長になってからも、決裁文書のチェックは超細かいって感じで。まあ、課長になってまで係長クラスの仕事してるんじゃないよ、あいつって批判もあるにはあった人なんですが。ほら、係長級としては優秀でも、課長となると、ちょっとって人、いるじゃないですか？　そりゃ、本人だって色々辛いのかもしれませんけどね。まあ、ともかく。しばらくは彼、仕事やってるっぽく見えたんですよ。でもねえ……」

再び三号が言いよどむと、一号が言った。

「でも？」

すると、三号は深く頷いて続けた。

「そんな感じで無駄な残業させられてるとですねぇ。いきなり夜中、課長からリングファイルが飛んでくるんですよ。頭に。書類が鈍器クラスに詰まったヤツが」

「……それは。かなりマズいだろ？」

二号が思わず息を飲んだ。

「ええ。僕、それで大怪我しましてね。ほら、ここ、この耳の後ろをファイルの角でざっくり。派手に出血もしましたしね。それでやっと課長を病院送りに出来ましたよ」

「ああ、本人が病院に行きたがらなかったから、はずせなかったわけか」

二号が合点がいったように頷いた。

「最終的には部長クラスと人事課から、奥さんに脅しかけて。やっと。診断書さえ取れれば、こっちのものですからね。それでやっと休職させたんです」

「部下達全員、お疲れさんって感じだな」

二号が同情の声を上げた。

「ホント。後ちょっと休職させるのが遅かったら、僕、命なかったかもですよ。で、怪我もしたし、半分口封じで、外に出してもらえたんです、人事院の海外留学。ハーバードに」

「それはそれで。良かったんじゃないのか？　結果的には」

一号が一言、つぶやくように言った。
「そうそう、お疲れさんてことだ」
二号も明るく付け足した。
「そう。それはまあ、良かったんですけどね。僕、やっぱ、あっち（ハーバード）では便サン、履けなくて。ナイキとか履いちゃって……」
苦悩の表情を浮かべる三号の肩を、バシンと叩いて二号が言った。
「ま、気持ちはわかるわな」
「三年間、自分が自分でないような気がしてたんです」
三号が震える声でこう漏らすと、一号が静かな頷きで応じた。
「それで、帰国してからは、ずっと『これ（ナカガワ）』です。やっと、色んな意味で、自分自身を取り戻せた気がしてます」
かみしめるように三号は言った。サンダリスト達の間に、再び沈黙が流れた。
「便サンは……なくせないよな。絶対」
口を開いたのは二号だったが、皆同じ気持ちにちがいなかった。
三号は、力強く頷いてから言った。
「一体、今、何が起こっているのか……でも、この陰謀は、阻止しないといけませんね」

15

15

サカキ・インターナショナル。

この上なく、おざなりな社名……。

だが……。

俺は茱萸坂を上がる途中で、皇居ランを終えた壮年男性に追い越された。

シューズは、ＭＩＺＵＮＯだった。

ふと、三号がアメリカで『ナイキ』を履いていたと言う話を思い出し、口元に笑みがこぼれそうになる。

アマタナコン工業団地か……。

タイには、政府主導で建設された工業団地が多かったはずだ。

星の数ほど、とは言わないまでも、まだまだ、新設も計画されているだろう。日系だったら、天ぷらやフライ用のエビなんかの加工食品の工場なんかが思い浮かぶ。

そういうのは、大手ないしは中堅の日本の食品会社が、タイに現地法人を作ったりするわけなんだが。

タイの工業団地に本社がある会社で、しかも日本法人を持つ、というのは……。

坂を登り切ったとこで、赤信号に引っかかる。

道向こうから、顔見知りの機動隊員が俺に向って頷いてみせた。
俺も軽く会釈を返す。
それにしても。サカキ、という名前には、何かひっかかるのだが……。

＊＊＊＊＊

経産の知合いっていうは、僕の大学の同期だったヤツのことだ。
彼は、運良く東南アジア方面に明るかった。
あまり知らないことについて、調査を頼んだところで、どうせろくな答えは返ってこなかっただろうから。
ヤツだって、クソ忙しい中、わざわざ面倒な調べ物をしてまで僕に作れる貸しなど、たかが知れているし。

アマタナコンは、二〇〇〇年前後に整備が進んだ工業団地だ。時期的には、省庁改革の直前くらいか。実際、かなりの所は、日本側の通産・ＪＥＴＲＯ主導で動いた話のようだった。

僕はその同期と、とある昼休みに待ち合わせた。
合同庁舎二号館の食堂の一番奥。窓際に陣取って昼飯を食べたのだ。

「もちろん、旧商工族系の某議員とかなんかも、かんでたけどな」

周囲にちらちらと視線を走らせながら、同期は言った。
かなりボリュームのある天ぷら定食を凄いペースで攻略していやがる。

誰も聞いちゃいないよ、こんな場所でこんな話なんか。
とも思ったが、まあ、こういうのも役人の習性だったりするから仕方あるまい。

ふと、僕はヤツの足下に視線を落とした。

ゴム底にビニール合皮の甲当ての付いたつっかけサンダル。
スーパーの横の衣料雑貨品チェーン店なんかによく置いてあるようなアレだ。

「アマタナコンにある会社について、情報とかって得られる方法ある？」

「え？　なに、どんな会社。日系？」

「と言うわけでは……」

「現地の小さいとこだったら、調べるのはちょっと面倒くさいかもなあ」
ヤツは天ぷら定食を完食して、茶碗の水を飲み干した。

デスクワーカーのくせに、そんなに昼飯喰うから。
同い年のくせに、もうすっかり出腹になっちまって……。

僕はのびはじめたソバの残りを、急いですすった。

＊＊＊＊＊

「ということなんですけどね、一号。メールにも書きましたが」

日曜日、東京駅八重洲口のとある店の前。
三号は約束の時間よりも五分ほど前に到着していたが、間髪をおかずに一号もやってきた。

「アマタナコン工業団地に進出した日系の企業のことについてだったら、ＪＥＴＲＯに聞けば、結構分ったんですが。その中に、『サカキ・インターナショナル』に関係しそうな物は、ちょっと」
三号は、改札に向いながら、早口で一号に巻くし立てた。

「アマタナコンに入ってる企業、わざわざ見てくれたのか？　三号」
一号の問いに、三号は照れたように慌てた。

「い、いや、あの。ざっとですよ。でも、大体が食品加工関係だったんで。ほら、『サカキ・インターナショナル』は」

「……樹脂加工業、だからな」
自動改札を通りながら、一号が静かに付け足した。

「細かいことは分からなかったんですが、事業実績としては、現地の小さい日系企業への、プラスティック製品の納入とかが、ちらほらあるくらいで。なんかノベルティのクリアファイルみたいな物らしいですけどね」
三号も続いて改札を抜けた。

「あのぉ。一号？　今日は一体どこに行くんですか？」
もじもじと、三号が尋ねると、一号は渋く微笑んでみせた。

「とりあえず、六番線に。Ｋ浜東北線の下りに乗ろうか、三号」

16

16

「こ、ここって……」

僕と一号は、K浜東北線を品川のちょっと先の駅で降り、私鉄に乗り換えた。
そして、大田区のセメント瓦の古い木造住宅と町工場が密集したような地域にやってきていた。

「一号、あの。ひょっとして……」

目の前にあるのは、ちょっと間口の広いおんぼろガレージといった感じの建物だった。

「三号、来るのは、初めてか？」
一号が、またもニヒルに微笑んだ。

な、なんだろう。一号の笑顔って言うのは、笑顔なのに、渋さが突然アップするのは、どうしてだ。

「そ、そりゃ。ここで物が買える訳じゃないですし……」

というか。ここが、ここが……？

シャッターの上の鉄板部分に直接書かれた色あせた文字を、僕は見上げた。

（有）中川

僕がぼんやりと看板を見つめていると、一号は引き戸を開けて、さっさと先に入っていく。慌てて、僕も後を追って中に入った。

一号が奥へ向かって挨拶をすると、奥から六十がらみの、何ともいえない風体の男性がのっそりと出てきた。

「ああ、あんたかい」

彼は一号とはすっかり知った仲のようだった。

脇で二人を眺めていた僕に、一号が声をかけた。

「こちらナカガワの社長。ナカガワ・タケハル氏だ」

まあ、確かに、有限会社なんだから、社長なんだろうな……等と考えていて、ついうっかりしていた。僕は急いで名刺を取り出した。

僕から渡された名刺を、眼鏡をずらして眺めながら、社長は「ほー、役人さん？」とつぶやく。

社長は、僕の足下を見たはずだ。

ナカガワは、この何十年、型は同じ物しか作っていない。

見間違えようもないだろう。僕のナカガワを。

だが……社長は何の反応も示さなかった。

……なんというポーカーフェイス。

僕の表情をさりげなく覗っていたらしい一号が、口を開いた。

「タケさん、こちらナカガワのサンダルの愛用者」

社長は、黄ばんだ古い保護マットの置かれた、どことなく片付かない印象のスチールデスクの上に僕の名刺を置いてから、こっちを振り返った。

「へぇ？　そうなの」

そして、初めて僕の足下に視線を落とした。

「ぼ、僕は、このナカガワの一貫して変らない足型が、普遍的な完成型としての……」

ナカガワへの熱い思いがほとばしりすぎて、つい支離滅裂になりながらも、僕はナカガワの社長に訴えかけた。

「え、あ、そう？　一体成型のゴムサンダルなんて。どれも似たようなものだよ？　ボクは見分けつかないなあ」

な、なんですと？

思わず一号の顔を見上げると、彼はちょっとだけ、困ったような表情で、またもや渋く微笑んだ。

いい、その笑顔もいい……。

っていうか。

僕、何でこんなに一号の笑顔に萌えてるんだ？

「タケさんはね、そういうことに、こだわりがないんだ。勿論、品質には凄いこだわりがあるけど。ナカガワブランドに対しては、まったく頓着しないから」

確かに。

別に、自分の製品を、たかが便サンとかって卑下してるってわけでもなさそうだったけど。

というか、さっきから、普通にニコニコと笑ってるし。

人のいい町工場のおっちゃんそのものと言うか。

「うん。勿論、うちのサンダルは、輸入物なんかと比べたら、しっかりしてるよ。履いてて簡単にベルトが切れたりすると危ないからねえ」

と、語る社長に一号は、静かに頷いて見せた。

そして、僕を振り向き、

「こういうところは、マツモトのオヤジさんとは、正反対」

とささやく。

ナカガワの社長は、そこで思いついたように茶渋の付いた急須を取り出してきた。

「タケさん、お構いなく。実は今日もまた、伺いたいことがあって」

一号は、要件を切り出した。

「『サカキ』っていう名前に、聞き覚えはないですか？」

社長は、それこそ鳩が豆鉄砲食らったような顔をしたが、すぐに何事かを思いついた。

「……さかき？　ああ、榊さんとこのこと？　随分と古い話だね」
今度は、僕の方が鳩豆だった。でも、一号は、社長の言葉を平然と聞いている。
「一時期はすごかったよねえ、サカキさんとこは」
社長は、ひとり頷きながら話を続けた。
「でもねえ、正直ボクは、サカキさんとこの店とは、そんなに付き合いはなくてね。マツモトさんとこのが、親しかったんじゃないかな？　今日も顔出すんでしょ？　あっちに」
一号は静かにうなづいた。
……えっと、顔、出すの？　一号、マツモトにも？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「悪いけどさ……あと十分で終わるから！　ちょっと外出てて」
会釈をしながら、僕と一号が工場（こうば）に足を踏み入れた途端、『マツモトのオヤジさん』は、今どき、どこいったって滅多に聞けないような無愛想さを滲ませた声で言い放った。
しかし、一号は勝手知ったるという様子で、そのまま奥へと進んで行く。
そして、事務室に入っていき、初老の女性に挨拶をした。

どうやら、マツモトのオヤジさんの奥さんのようだ。旦那の分を埋め合わせるかのように、腰の低い女性だった。

白いレースカバーの掛けられた古い小さなソファーセットのところで、僕と一号は、奥さんが丁寧に出してくれた緑茶をすすって、オヤジさんの作業が一段落するのを待った。

「そういえば、ナカガワさんのところで伺ったんですが」

一号が奥さんとの世間話の途中で、こう切り出した。

「『サカキ』さんとは、以前、お付き合いがあったとか？」

奥さんは、一瞬、首をひねったが、すぐに得心が行ったように頷いてみせた。

「え？　ええ。あらまあ、懐かしいわねえ。サカキさん。もう何十年前になるかしら」

えっと。いや、一号、あのさ。一号は、解ってるのかもしれないけど、僕、全然ついていけてないのですが。

「あ、あのですねぇ、一号。すいません。『サカキさん』ってのは」

僕が思いあまって口にすると、一号と嬉しそうに話をしていた奥さんの方が振り返った。

「あらあら。ごめんなさいねえ。サカキさんっていうのはね、サンダル屋さんだったの。うちと同業」

……へ？

すると、一号も僕を向いて言った。
「やはり……お前は知らなかったか。まあ、無理もない。俺だって、名前に聞き覚えがあるといった程度だったからな。三号、『サカキ』はな、伝説の便所サンダルメーカーだ」
……伝説の便サンメーカー？
『サカキ』が？！
「『サカキ』の実物は、俺も見たことはない。だが、一九七〇年代、便サン市場の黄金期だが。当時、サカキは、シェア六割とも七割とも言われていたらしい」
……シェア、七割だってぇ？　そんな馬鹿な。
「今日は、また何の用事かと思えば。随分と聞かなかった名前を持ち出すじゃないか」
首にかけたタオルで顔をぬぐいながら、マツモトのオヤジさんが事務室に入ってきた。
事務机の前に置かれた、これまた年代物の、鼠色の合皮の事務椅子に腰かけると、オヤジさんは奥さんの持ってきた湯のみに口をつけた。
「サカキさんのところはなあ、当時にしては、エラくいい機械入れて、ヒトも結構使ってたからな」
「そ、それでシェア七割……ですか」
僕が思わず口にすると、オヤジさんは湯のみを机に置いて、こちらを睨むように見た。

「そりゃ、あんた。あの頃は。作れば作っただけ売れたもの」
「オヤジさん、そのサカキは今は？」
一号がさっくりと確信に切り込んでくる。
ふたたび、湯のみに口をつけかけたオヤジさんは、ちょっとむせるようにして言葉を返した。
「サカキさんのとこもなあ。あんなことさえなけりゃな」
……あんなこと？
横の方で、僕たちの話を聞いていた奥さんが口を開いた。
「事故でねえ。高速道路で。天気が悪かったし、ご夫婦二人ともねえ……」
「ご遺族は？」
沈黙が気まずくなる直前の絶妙のタイミングで、一号が質問した。
「あれだなあ。男の子がひとり……」とオヤジさんが言うと、奥さんの方が付け足した。
「そうそう、幹夫君」
そこでふとオヤジさんが、僕の方を向き、突然言った。
「あんた、それ『ナカガワ』だろ？」
せんから承知、といった感じだった。
「今のあそこの金型はな、その時サカキから買ったもんだよ。大きな商売やってたっていっても、所詮はサンダルだけだっただから。

社長達が亡くなっちまえば、廃業だ。あっけなかったな。だから、それはサカキの製品と形はほとんど一緒ってことだ」

「……それで『サカキ』は、幻のように消え失せ、伝説となったというわけか」

一号が納得したようにつぶやいた。

「サカキには、他の足型もあったがな、いま残ってるのは、多分、ナカガワのそいつだけだ……」

オヤジさんがちょっと遠くを眺めるようにして言う。

今度の沈黙は、長く重苦しかった。

僕はさっき訪れたナカガワの社長の言っていたことを思い出していた。

ウチの足形が一つなのはねぇ、この金型を買った時、資金がなくてねぇ……と。

17

17

マツモトの工場（こうば）を出ても、僕の気持ちは沈んだままだった。

だって。

マツモトはともかく、どう見てもナカガワは、それほど経営に余裕があるわけでもなさそうだった。まあ、今どきの日本の町工場なんて、そんなものだろうけど。

それに、マツモトのオヤジさんも、ナカガワの社長ももうそんなに長く、あそこを続けられる歳じゃない。

あと、せいぜい十年かそこいら。

今回、僕たちが調べている『サカキ・インターナショナル』による国産便サンの買い占めが、便サン市場を脅かす直接的で切迫した問題なのは、間違いないけど……。

ただ、長期的には？

つまり。

ナカガワとマツモトには、後継者がいないみたいだし……。

一号は、僕の考えていることを察していたのかも知れない。

ＪＲの駅前に着くまで、ただ黙って、僕と歩調を合わせてくれていた。

そして、改札の前まで来た時、一号は初めて口を開いた。

「三号、これからまた、庁舎に戻るのか？」

「いやぁ、さすがに今日は、もう仕事は勘弁してもらおうかと」
僕は、ショルダーバッグのストラップを直しながら答えた。
「どこかで何か食って帰ろうか……そっちに予定がなければだが」
一号がそう言った瞬間、僕の鼓動は止まり、そして、すぐに今度は早く激しく打ち始めた。
そう、それこそ早鐘のように。
「ああ、ハイ」
僕は、努めてさりげなく返した、なるべく、声が裏返らないように気をつけて。
「何がいい？　何でもつきあうぞ」と言って、一号は、口の端を軽く上げて微笑する。
「な、何でも……一号は、いつも夜、どうしてるんですか？」
僕は、激しくドギマギしていた。
「まあ色々だな。家で作る事もあるし」
何気なく一号は答える。
というか。誰か……作ってくれる人が？
だが、この言葉は、ぐっと飲み込む。
「い、一号にお任せしますよ」
一号が、無言でこちらを一瞥するので、僕は、慌てて付け足した。

「いや、あの。仕事柄、外に食べに行く暇とかないし、よく知らないから」

僕たちは、東京駅で地下鉄に乗り換え、A坂見附で降りた。

地上に出ると、一号は黙って歩き出し、路地裏のかなり小さな店に入っていった。

小料理屋、いや、焼き鳥屋といってもいいかもしれない。

まあ、飲み屋のような、食べ物屋の様なそんな店だ。

その店に一号が入れていたらしいボトルをお湯割りで空けながら、つまんだ肴はどれも美味かった。

良さ気な銘柄の焼酎だったし、もずくとか。そういうものは、久しぶりに食べた。

っていうか。

いつも売店の弁当が、庁舎の自販機のニチレイ冷凍食品とかしか食ってないから。何食ったって、そりゃ美味いとしか言えないかもしれないけど。

食事しながら、一号と何を喋ったのか、あまりはっきりとは覚えていない。

多分、益体もない話だ。

僕は、なぜかすっかり舞い上がっていたし、久しぶりのアルコールは、かなり早く回ったようだった。

店を出て、一号に抱えられてタクシーに乗ったところまでは、何とか覚えていた。
……そうさ。タクシーチケットなら、僕のポケットにいくらでも入っているんだ。
束で。

まぶたに突き刺さる日差しで、僕は目が覚めた。
コーヒーの匂いと肌に触れる張りのあるシーツの感触が、心地いい。
僕は、自分がきちんと横になって眠っていたことに、驚いた。
しゃがんで柱にもたれたままじゃなくて。ちゃんとベッドの中で。
しかも。
あろうことか、パンツ一丁のあられもない姿だった。
そもそも。ここって、宿舎の自分の部屋じゃない！
僕は跳ね起き、純潔を奪われた乙女のように、あわててシーツで胸を覆った。
壁には、僕のスラックスとジャケットが、几帳面にハンガーにかけてある。
シーツで体を覆ったまま、おそるおそるその部屋を出て、コーヒーの香りのする方へと近付く。

「起きたか？」
落ち着いた一号の声がした。
一号は注ぎ口の細いやかんを持って、コーヒーを入れていた。
右手には金魚すくいの網みたいな物を手にしていて、お湯がそこに細く細く注がれると、コーヒーの粉がふわふわに膨れ上がる。
一号は、サーバーからカップにへとコーヒーを注ぐ。
そして「飲むか？」と僕に訊ねた。
「宇宙人の好きなヤツじゃなくて悪いが」
そんな風にちゃかされても。
僕は、まだ、きまり悪いやら、状況が飲み込めないやらで、何にも言い返せなかった。とりあえず、黙ってコーヒーを受け取り、一口飲んだ。
多分、すごい良いコーヒー豆なんだろうと。
それだけは分った。それこそ二日酔い野郎なんかには、もったいない位の。だって、一口飲んだだけで、もう、耳までコーヒーの香りがするような感じだもの。
一号が「砂糖とか使うか？」と聞いてくれた。
僕はそれを断ってから、おそるおそる一号に尋ねた。
「こ、ここって、一号の……部屋？」
一号はコーヒーを飲みながら、あいまいに頷いた。
なんの変哲もない部屋。別に僕にインテリアの知識がないからそう

思うっていうだけじゃないと思う。
なんと表現しようもないのだ。
これと言った特徴も特色もない。でも、趣味が悪い、とか殺風景だ、といった風でもない。
そこにあったカーテンも、椅子も、机も。どれも実はかなり物はいいのではないかとは分る。でも、あとからその部屋を説明しろと言われても、どうにも説明しようがない。

さりげない、とでもいうのか。
居心地が悪いというのでは決してない。それだけは断言できる。だって、初めて来た場所なのに、僕は、なんだかとてもくつろいだ気分になっていたのだから。

「あ、あの。昨晩は……えっと」
やっぱり、言葉が続かない。一号は僕を見て、面白そうに微笑した。

「三号、昨晩は『タクシーチケット使え使え』ってうるさかったからな……」
そういうと、後ろのテーブルからレシートを取って、僕に差し出した。

「ま、あそこまで言われてはね。ありがたく使わせてもらった」
僕はそれを受け取りはしたが、裸にシーツの出で立ちではどうする事も出来ず、そのまま、レシートは片手に持っているしかなかった。

「あの、さ。その。昨日」
僕はもう一度、一号に切り出そうとした。

……昨日、あれから、僕たちって？

すると、一号が、突然、真面目な表情に戻って言った。
「いい機会だ。この際だから三号に言っておきたかった事がある」
……それはあまりにも突然すぎた。
僕は血の気が引いたかと思ったら、今度は、耳の奥までカァーっと体が熱くなるのを感じた。
「前々から、思っていた事なんだが」
でも、僕のそんな気持ちにはおかまいなしに、一号は続ける。
「三号、お前の仕事が色々大変なのは、解っているつもりだ」
一号が僕を見つめる。
「でも、少しは考えて欲しい」
僕は、やっとの事で声を絞り出した。
「……な、何を？」
「三号。疲れてないか？」
一号が手をそっと、僕の方へと伸ばす。思わず、少し後ずさりした。
「……髪だ」
「へ？」
「男の疲れは、まず、前髪に出るからな。女性はよく、肌が荒れた

りするが」

「い、いちごう？」

「お前はまだ、若いし、遅くはない。できるだけ睡眠をとって、食事で色々な食品をちゃんと摂取しろよ」

……は、はいぃ？

「即効性があるわけじゃないが、わかめとか昆布とか、海苔とか。馬鹿にしたもんじゃない。きちんと何年か続ければ、絶対、効果がある」

一号……。

それって。それって僕が。

僕がハゲってこと？

そういうこと？　一号。

「医者にかかるという方法もあるしな。テレビでＡＧＡ治療のＣＭやってるだろう？　お笑いの奴がでてるな」

僕に、テレビ見る暇なんかあるわけないだろ……一号。

「よかったら、知り合いに内科もやってるいい皮膚科がいる。紹介するか？」

首を横に振ったきり、黙り込んだ僕に、一号が済まなそうに言った。

「悪かった、随分と立ち入ったこと言って……だが」

……だが？

「友の会でも皆、三号のこと心配している」

友の会って、一号も二号も、あの会長も、みんなみんなして、何ですか？

僕の頭髪問題について、相談したとでもいうんですか？

そっちの方がよっぽど。

よっぽどあんまりじゃないか？　あんまりじゃないんですかぁ！

一号が、伸ばした手を、そっと僕の肩においた。

大きな手だ。暖かい。

「とりあえず……シャンプーの後は、しっかりすすげよ。まずはそこからだ、三号」

……僕は、僕は情けなくなって、コーヒーカップに涙をこぼした。

こんな、こんな裸同然の格好で、ひょっとして一夜を共にしたかもしれないと淡い期待を抱いた男に、頭髪問題を心配されるなんて。

「おい、泣くなよ。三号。解ってるから」

一号が優しく僕の肩を揺すった。

「二号も言ってたぞ。三号は、よくやってるって」

「……え？」

「自分だったら、あんな仕事は続かんとさ」

「いちごう……」

「俺もそう思う。三号。お前は立派だ」

僕は、とうとうこらえきれなくなって、声を出して泣いた。

ひとしきり泣いて、シーツが鼻水まみれになった頃、一号が、隣の部屋から僕のスーツのかかったハンガーを持ってきた。

「今日、このまま出勤するんだろう？　スラックス、プレスしといたぞ。ほら、着ていけ。あと……」

と言って、別のハンガーにかかったシャツを、一緒に僕に手渡した。

「三号の着てたワイシャツ。焼き鳥のたれでベトベトになって、どうしようもないから捨てた。これを着ていけ」

一号の。一号のワイシャツ……。

一号は、僕からカップとシーツを引きはがすと、カップを流しに、シーツを別のどこかへと持っていった。

どこのメーカーのなんだろう、このシャツ。

袖を通す前にあちこち調べてみる。

これまた何の変哲もない白のシャツだった。

形はやや細身で目の詰んだ上等そうな布地でできていた。

……ない、どこをひっくりかえしても。

何の表示もない。

品質表示も、メーカーのタグも、サイズ表示も、なにもかも、綺麗に切り取ってあった。

「なにやってる？　早く着ないと風邪引くぞ」

一号にせかされて、僕はあわててワイシャツとスーツを着込んだ。

シャツの袖が、かなり長い。

一号は、ジャケットのポケットにいれてあった僕の財布やらハンカチやら身分証やらと一緒に、タクシーチケットの束とさっきのレシートを、僕の前に置いた。

「下の道から、車、すぐ拾えるから」と一号は言い、

「どうせ、電車には乗らないだろう？」と笑った。

昨日から、一号の笑顔をよく見るなと、そんなことをぼんやり考えながら、ポケットに色々詰め込んで、洗面所で、形ばかり顔を洗った。

いくらなんでも、そろそろ事務室にいなければまずい時間だった。

僕は、一号の家の玄関を飛び出しながら、「一号は？　出勤するんでしょう？」と訊ねた。

「無論だ」

一号は意味深な口調で一言いうと、右手で軽くバイバイをして静か

に、玄関の扉を閉めた。

18

18

澄み切った空気の中、バグパイプの音が響き渡る。

お昼休み、国会前庭園。

「桜の葉っぱも、みぃんな落ちちゃったよね」
いつものベンチに座り、軽い吐息をもらすマヒルである。

「なに？　会長、昼飯足りてないのか。おにぎり、いつもと同じ個数食ってただろ？」
二号はタッパーの蓋でを半隠しにしながら、弁当を食べている。

「ちょっと、二号。あんたに晩秋のメランコリィってものは、皆無なワケ？」

二号は食べ終わった弁当のタッパーを、洗濯のしすぎで端がだいぶ擦り切れてきた偽ミッフィーのキルティングバッグに入れながら答えた。
「つかさ、メランコリィっていったら、会長よりあいつなんじゃないか？　どっちかっていうと」

二号が視線を走らせた先には、どこか遠くに視線をさまよわせている三号が立っていた。
手には、宇宙人の好きな缶コーヒーを手にしているが、いつものミルク・砂糖入りのオーソドックスタイプではなく、微糖・ブラックである。

「え？　あれってメランコリィっていうよりはさぁ、仕事が忙しすぎて、とうとう心とか折れてるって感じじゃなくて？」

だってさ、前髪とか、いつもに増してなんか、疲れてるっていうかさ。毛全体として、パワーないって感じっていうかさ？

「いや、会長。ココロとか折れてたら、それまずいだろ？　さすがに」

あら、そうかしら。今どきの公務員、そんなのめずらしくもなんともないけど。

おや？　でも、今、なんか三号。ちょっと目がうるんでたりする？

なんて思いながら、マヒルがちらと二号を顔色を伺てみると、二号もいわく言い難い微妙な苦悩に満ちたような表情を浮かべて、マヒルの方を見ていた。

公園の時計塔が、十二時十九分を指している。

バグパイパー佐藤さん（仮）の向こう。

茱萸坂方向に視線を向けていた三号の表情が、ぱっと明るくなった。

「あ、一号！」

その瞬間、バグパイプが音を立てた。

「……ねえ。二号。先週末って、一号と三号ってさあ、『何か』あったのかなあ」

マヒルは二号の脇腹をつつ付き、耳打ちした。
「会長。あのさ、そう言うマンガとかみたいなこと、現実にそうそうあるもんじゃないから」
二号はやや冷たく言い返す。
そんな。ホントは二号だって、何かあやしいとか思ってるくせに、もう。
「何をごちゃごちゃ喋っている？」
一号がベンチの前までやってきていた。
「お。おう！　一号。日曜は色々と分かったみたいだな」
二号は、早速一号に話しかけた。
「ねえねえ。一号、あのさ」
マヒルが口を挟もうとすると、二号が慌てて遮る。
「やっぱ『サカキ・インターナショナル』とあの『サカキ』って関係あるのか？」
ちょっと、二号。なんなの？
そんな心配しなくても、別に「日曜、三号と何かあったの？」とか、聞かないし。
一号は、手にしていた缶コーヒーを開けると、一口飲んでから二号の問いに頷いた。
「まさか『サカキ』が、実在のブランドだったとは……」

二号が驚きを隠せないといった風に続ける。
「オレ、一種の都市伝説だと思ってたから」
「二号は『サカキ』を知ってたんですか？」
一号の隣に、寄り添うように立っている三号が言った。
「まあ、ホント、むかーし、入省したての頃にな。退職間際の同僚から聞いたことはあったって感じで」
「それでぇ？　その伝説の便サンブランドはさぁ。何十年も前につぶれてるんでしょ？　しかも、社長とかは死んでて。タイの樹脂加工業の『サカキ・インターナショナル』とホントに関係あるワケ？」
マヒルはやっと口を挟むことが出来た。やれやれ。
すると、三号が、紙を取り出し、これまた、いつもにまして自慢気な声を上げた。
「『サカキ・インターナショナル』の本社社長の名前は、ミキオ・プーンタラットです」
「それが？」
マヒルが言い返すと、今度は一号が引き取った。
「『サカキ』の社長夫妻には、当時小学生の息子がいた。榊幹夫という」
そこで、二号が、ああ、と膝を打つ。
「『インターナショナル』の社長の名前が、ミキオってことだな」
「またまたぁ、ミキオって、タイ人に普通にある名前とかなんじゃ

ないの？　たまたまだったりしない？　だって、苗字はプーなんとかなんでしょ？」

マヒルのコメントに二号が横から口を出してきた。

「確かタイでは、苗字はあまり重要じゃないっていうだろう、あっちで結婚でもしたのかもだし」

「えー。何よ、二号。何でそんなにタイ事情に詳しいのさぁ、ひょっとして、あんた『そういう遊び』とかにハマってるんじゃないんでしょうね？」

「なんだよ、会長。カミさんの弟が一時期バックパッカーやってたんだよ、つか、何だよ、その『そういう遊び』ってのはさ？」

「その幹夫も『深夜特急』ゴッコがこうじて、どこかに行ったきりだとかって。ね？　一号」

三号は一号を見上げながら言った。

「どっかって、どこ？　そして誰が言ったのよ」

マヒルが詰め寄ると、今度は一号が答えた。

「マツモトのオヤジさんが、な」

ああ。マツモト、松本製作所ね、はいはい。

「で、その『サカキ・インターナショナル』の社長ミキオが『サカキ』の息子だったとしてさ、何で日本の便所サンダルを買い占めるとかするのよ？」

マヒルの核心をつくこの問いは、なぜかサンダリスト達にスルーされた。

「その仮説によれば……バックパッカー上がりの男が、タイでは一応、工場持ってる実業家になってるってことなんだよな？」
二号が、ふと感想のように漏らした。すると三号が応じた。

「……確かにね、商売立ち上げる位なら、タイだと割とたやすいんだろうとは思いますが。あのアマタナコン工業団地に、小さくても設備を入れられるっていうのは。特に、アマタナコンというところは、タイの公社よりも、日系の団体や何かの力関係の方が強くて出来た所のようですし……」

「じゃあじゃあ。なんかコネがあったんじゃないかってことね？
ミキオには」
マヒルは思わず詰め寄った。
なになに？　ちょっと。これは、ぐっと陰謀臭くなってきたじゃないのぉ？

「しかし、いつまでサンダルを買い占める気なんだろうな。三号が調べたところでは『サカキ・インターナショナル』は大した仕事の実績、ないんだろう？　いくら、金額が年に数百万円レベルとか言ったって。資金とかさぁ」
と言って、二号はペットのお茶を飲み干す。

「ねえねえ。そういえば、前の与党のトップでさ。サラブレッドの二世議員。通商族だったさ、前ちょっと調べたら、今はタイ関係の社団法人とかの顧問とか、あちこちやったりしてるみたいだし。そういう議員の口利きがあれば、その、何とか工業団地にも入れるでしょう？」

「会長もまた、随分デカイ話ぶちあげてくるなあ。まあ、そのクラ

スの議員のあれこれって。大商社とのパイプで名前貸してるってパターンだよ。言っちゃなんだが、便所サンダルの買い占めごときに……」
二号が口ごもる。

「たしかに、今回の件というのは。利権がらみで動くにしては、ちょっと金額的に中途半端ではあるんですよねぇ」
三号が眼鏡を押し上げながら、甲高い声を出した。

「なによ、三号、そりゃね。あんたなんかはどうせ、金なんか十桁より上からしか見ないような仕事でしょうけどねぇ」

一号が渋い低音で、場を制した。
「ともかく、ミキオ・プーンタラットの背景を知ることが、今回の問題の核心に近づくためには遠回りなようでいて、一番の近道のようだな」

サンダリスト達は、しばらくの間、沈黙を続けた。

佐藤さん（仮）のバグパイプの音色だけが、初冬の国会前庭園に流れている。

結局、マヒルがあてもなく口を開いた。
「で、どうしようかねえ……」

「とりあえずは、何も浮かばないな、それぞれにミキオについて心当たりをあたるくらいしか」
一号が淡々と言い放った。

「で、でも、一号、そうは言っても……」

三号が心配そうに呼びかけた。だが、一号は涼しい顔で言った。
「いい天気だな。バグパイプにでも、耳を傾けよう」
「あれって……上手いんですかね？」
三号が漏らした。小声ながらも、甲高く、遠くまで通る声だ。
本人は気がついていないのかもしれないが、まったくもって密談向きではない。役人としては、かなり致命的な欠点であろう。
すると、一号が、くだんの妙にニヒルな微笑を口元にたたえ、三号に言った。
「どうだろうな……三号、自分の心の声に耳を傾けるんだ」
「こころのこえ？」
「お前が上手いと思えば、上手いのさ。じゃあ」
こう言い捨てると、一号は茱萸坂の方に向って歩き去った。
そんな一号の後ろ姿を、目で追いながら三号がつぶやく。
「一号……」
マヒルは思わず、ニタリと笑った。もちろん、ニヒルとは、ほど遠い顔であった。
「三号、今、一号にグラッときてるでしょう」
「おいっ、会長」
二号が、横から鋭くささやく。
「なによ、二号。いいじゃん、いいじゃん。恋愛は自由だよね」

「いや、そう言う問題じゃなくてさ」
また、二号が小声でマヒルにささやいた。そんな二号の制止には構うことなく、マヒルは続ける。
「ねえねえ、三号、一号に気持ち伝えてみればぁ？」
この言葉に、三号はビクリと肩を震わせた。
「別に……そんなんじゃ」
そして、頬を朱に染めると「僕、庁舎戻りますからっ！」と一声叫んで、Ｔノ門方向へと走り去っていった。
佐藤さん（仮）のバグパイプの音が一声、啼いた。
佐藤さん（仮）の頬を伝った汗が、顎の下から、ぽとりと滴り落ちる。
二号が仏頂面でベンチから立ち上がた。
「会長さ、安直に三号をけしかけてるけどな。オレは一号には、そういう気は全然ないと思う」
二号の口調は、かなり険しかった。
「そ、そう？」
二号ったら、何怒ってるのよ、ちょっとぉ。
「あんまり三号を調子にのせるなよ、振られたら可愛そうじゃないか」
「……」
「会長、あれかよ？　いわゆる腐女子とかってヤツ？　そういうの

はあまり実際の人間関係に当てはめるのはどうかと思うぜ？」
二号のこの台詞に、マヒルの眉がピクーンと跳ね上がった。
「……なんですって？」
「いや、だからさ」
マヒルの発する、怒りの黒いオーラに気圧されて、二号は言葉を詰まらせた。
「あんた、さっきからこっちが黙ってれば、聞き捨てならないこと言ってくれるじゃあないの。何？　三号が一号に告ったくらいで、『腐女子』狙いだと？　その程度のことで、腐女子の皆様が反応するとでも思ってるの、愚かしい！　二号、あんた、腐女子の何をわかっているというの、『腐』の道と単なる同性愛を取り違えているんじゃないの？」
「え、いや……その」
「昨今安易に『腐』を語る人間が多いけどね。あの道は、深くて広いのよ。とてもじゃないけど、あたし達などには、手に負えない世界なのね。あたしは一生自らを『腐』と名のることなどないでしょうよ。恐れ多くもそんな単語を口にしたいのなら、まず、カサと傘立てとリーマンの三角関係における萌えを語れるようになってからにすべきなのよ！　二号。お謝りなさい、全国四千万人の腐女子の皆様方に。手をついて、スイマセンでしたとお謝りなさい！」
「す、スイマセンでした……」
二号はおずおずと謝った。

「……分かればいいの」

マヒルはそのままベンチから立ち上がり、ドスドスドスと憲政記念館の方へ向って歩き去っていった。

19

19

ああ、なんか。
なんであんなに、二号にイラッと来ちゃったんだろうなあ、もぉ。
……ひょっとしてＰＭＳ（生理前）？

マヒルは身分証を形ばかり見せながら、通用口の衛視の前を突っ切った。
渡り廊下から、そのまま院内に足を踏み入れる。

さすが古くても赤絨毯。
マヒルがドスドスと歩く足音は、吸い込まれるように消えていく。

階段の入口の右側に設置された、議員の一覧表に視線を走らせる。
登庁した議員が自分の名札にランプをつけるための押しボタンが、びっしりと並ぶ、いわば特殊用具だ。

エレベーターの回りにぐるりと螺旋状に作られた階段は、通行量の割には作りが狭くて気をつけないと人とぶつかりそうになる。

ちょうど、二階のエレベーター前に出るあたりで、マヒルは降りてきた議員とばったり正面から行き会ってしまった。

慌てて身をはすかいにし、多少の場所を空けて、議員を通すマヒル。

相手は相当のご老体議員だった。

階段なんか使って、随分とカクシャクとしたものだこと、ジジイはエレベータ使っとけや、おりゃ。
っていっても。
まあ、政治家って最後の最後まで、体力勝負だからねぇ……。
あれ？　この人誰だっけ、えっと、えっと。
マヒルがそんなことを考えているうちに、老体議員は踊り場を曲がって、階段を降りていく。
しかし、その瞬間、偶然にも彼の足下に、マヒルの目が留ったのだった。
そう。その老体大物議員の足には、便所サンダルが光っていた。
……ナカガワ！
マヒルは、瞬時に気がついた。
アレは『ナカガワ』だ。
間違いない！
踵を返すと、マヒルは階段を三階まで駆け上がった。
そして、事務室に飛び込み、棚から手当たり次第に資料を抜き出して、窓際の自分の机の上にぶちまけた。
猛然と資料のページを捲り、パソコンのキーボードを叩く。
仕事上では、まず発揮されない集中力、猛烈な気迫をみなぎらせ、マヒルは調査に没頭していた。

「会長！　こっちこっち」

四種のデリ定食が載ったお盆を持って突っ立っているマヒルに向って、二号が奥の端っこのテーブルのところで、大きく手を振っていた。

スカンジナビアンもどき。
一歩間違えれば、昔のプレハブ小学校みたいな家具と内装のセルフサービスカフェだ。
地下鉄Y楽町駅下車、徒歩1分。

席には、もう全サンダリスト達が集まっていた。

「昨日のメールだが……」
一号が口火を切る。飲んでいるのは、ポットの凍頂烏龍茶のようだ。

「あの某大物議員が『サカキ』に関係あるってことなのかよ？　あのメール。悪いけど相当、電波ゆんゆんだったぜ、会長」
二号が、グラスビールをグビグビやりながら横やりを入れた。

「ホント、まったくもって要領をえない内容でしたねぇ」

……三号、あんたは、いちいち最後に余計なんだってば。

「あれ、そういえば、金曜の夜なのに二号。こんなとこ来てて大丈夫なの？」
めずらしくマヒルが、他人に配慮を見せた発言をした。

「明日から連休だろう？　カミさん。今日休み取って、すももと実家に帰ってるからさ」
二号は朗らかに答えた。
なるほど、それじゃビールも美味いわけだね。
「で？」
一号が話の続きを促した。
「だからー。あの衆議院議員の楡山平八郎がね、履いてたの。ナカガワを、院内で」
「楡山議員つったらあの『マイロール事件』とかのだろう？　超大物だよな」
二号が目をまん丸にしている。
「そうそう。『わたしの仕事、ぼくの生き甲斐。マイロール』っていうあの、転職会社のマイロール事件ね」
「与党内でも異色のたたき上げ議員でしたね。幹事長まで上り詰めたのは、異例中の異例でしょう、でも、たしか、未入閣でしたっけ」
ああ、もう。三号は、どうしても一言ひけらかしたいヤツなのだ。しょうがないのでスルーする。
「つかさ。会長。国会に勤めてんのに、何でそんな大物が、便サン履いてることに今まで気付かないわけ？」
二号は、カフェのグラスビールなぞはあっさり飲み干してしまい、ちょっと物足りなさそうである。
「ちょっと、二号。あたしが働いてるのは、国会じゃなくて参議院

！　楡山議員は衆議院議員一本でしょ。滅多にこっち側なんか通らないんだから、知らないよ。そもそも。そうしょっちゅうは、院内に来ないだろうし」

「それで。ともかく、ナカガワを履いていたからという理由で、楡山を調べてみたんだな？」
一号が、再度、話を戻そうとした。

「そう！　でね。色々判ったワケ。まずさあ。出身は群馬なんだけど、えっと、埼玉に凄い近いところ。でも、十代のころから東京に住んでてね、足立区界隈。区議会議員になってるわけよ」

「足立区……」
三号がレモンパイを飲み込みながらつぶやいた。
このメンバーの中で頼んでるモノが一番おとめチックかも……。

「『サカキ』の工場があったな」
一号も独り言のように言う。

「まあ、足立区議時代何やってたかとかは、全然調べる時間なかったけどね。国会議員になってからのことは、ちょっと『分館の主』に聞いてみたわけ」

「何だよ？　『分館の主』って」
二号は空のグラスを未練がましく手にしている。

……だめよ。
二号、あたしのトレーのビールを見つめても。ひとくちだってアゲないから。

「えーと。衆参の真ん中の、あの三角屋根の下にさ。国会図書館の分館があるのよ。大きい図書室が。そこでずーっと油を売ってるオジサンがいて。衆議院の事務局の人だと思うんだけど。衆参の生き字引と言われてる人でさ。いつも昼過ぎに閲覧室で、週刊ポスト熟読してて」

「まったくもって、税金の無駄遣いですね。だから公務員批判がやまないんですよ！」
三号が眼鏡を押し上げる。

「でもさ、案外、無駄も大事だったりするんだよ、三号。ま、それはおいといて、その『ヌシ』に聞いてみたのね、楡山議員のこと。まあ、色々知っててさあ。便サンはね、初当選時から履いてたらしいの。議場に履いて入ろうとして、衛視に停められたとかいう埋もれた伝説もあるらしいよ。政治家としての支持母体は、最初はやっぱり下町の中小企業だったらしいし。でね、住所とかを、議員要覧とか遡って全部調べてみたら、あれなんだよ。昔の『サカキ』の事務所とご近所。絶対、お互い知り合いだったんだよ」

「楡山議員ってのはさ。マイロール事件の時にもあれだったが、結構、男気あるっつうか。そういう感じの政治家だろう？　変な買い占めとかそう言うのに荷担したり、工業団地に口利きしたりとかするのかね。しかも、利権としてはちっぽけだぜ？」
二号が首を捻っていると、一号が、シブーい低音でつぶやいた。

「カネ、じゃなければ？　なにか動機が……」

「さっすが。一号。あたしが見込んだサンダリスト！　そう。そうなのよ。だって、未だに便サン履いてるんだよ？　楡山議員。しかも、院内で」

マヒルは思わず声を大きくした。
横の席のカップルの女が、露骨にマヒルを睨む。
あ？　何よあんた、ここは、あんたの店かっつーの！　と内心マヒルがむかついていると、三号がこれまた、マヒルへの当てつけのように声を落として言った。
「今のナカガワの型は、元々はサカキのものだったって、マツモトのオヤジさんが言ってましたね……」
「楡山議員には、何かサカキのサンダルに対して、思い入れがあるってことか」
一号のつぶやきに、マヒルは力強く頷いた。
隣のカップルが席を立っていく。
はいはい。気に入らないなら、そうやってさっさっと出て行けばよかったんだよ、とマヒルは心の中で、カップルの女にアッカンベーをしながら、グビリとビールを飲む。
「じゃあ、『サカキ・インターナショナル』の社長のミキオは、榊幹夫と同一人物であるっていう線が濃厚ってわけか」
こう言って二号は深く溜息をついて、席を立った。
多分、ビールのおかわりを買いに行ったんだな。間違いない。
「しかし……。当てずっぽうとはいえ、なかなか鋭いところを掘り返してきたな？」
一号が、微笑みながらマヒルを向いた。
今回のは渋いというよりは、もうちょっとチャーミングな微笑だった。

あらいやだ、三号じゃないけど。
やっぱちょっとドキドキしちゃうよね。一号の笑顔はさ。
「えへへへ。会長様を見直した？　ほら、能ある鷹は爪を隠すって言うでしょ」
すると、三号がすかさず口を挟む。
「別に、誰も誉めてはいませんから」
なに？　三号ったら、男の嫉妬は醜いわよ？
「なあ、くどいかも知らんが、買い占めみたいなチンケなやり口の男と、あの楡山議員が関係あるなんて、何かしっくりこないんだよ、オレ」
二号が戻ってきた。
やはり、手にはしっかりビールのグラスが握られていた。
「そうだな。議場に便サンで入ろうとする男だからな」
一号が言うと、三号が感に堪えないといった感じで続いた。
「……漢、ですよねぇ……」
二号が、二杯目のビールをグビグビやりだしたところで、三号も飲み物を買いに立った。
友の会にしては、めずらしいことだが、何となくその後も駄話が続いた。みんな金曜の夜の町のムードに、ちょっとばかし流されていたのかもしれない。
「……二号は確かに、キレンジャーって感じですよね」

三号の言葉に、一号も反応した。

「ほう、気は優しくて力持ち、ってとこか」

「そうそう。何かのマンガでも言ってたけどさ。いつもはおちゃらけてるんだけど、ピンチのときは、部隊を庇って真っ先に死んじゃう役どころ」

マヒルは説明を追加する。

「おい、待てよ」と、二号が割って入る。

「オレは、おちゃらけてもいないし、真っ先に死んだりはしないからな。お前らと違って、守るべき家族があるんだから」

すると、三号が、少々ムッとした。

独身であることに一番引け目を感じるようなタイプなわけだ。

そんな三号を尻目に、マヒルは溌剌と言い放った。

「家庭だったら、あたしだってあるもん！」

「え？」

一号から三号までの全サンダリストが声をあげた。

「なに？　何か問題あるワケ？」

マヒルは、一番癇に障る甲高い声で驚いて見せた三号のほうに詰め寄る。

「い、いえ……別に」

「ほー。会長、ダンナいたんだ？　でも、子どもはいなそうだな」

二号は、比較的淡々と受け止めているようだった。

「しかし、物好きですよねぇ。そのダンナ。どういう趣味なんでしょうか？」と、三号が聞こえよがしに一号に耳打ちしているのを、マヒルは鼻で笑ってやった。

「その程度の思慮浅薄さだから、三号、あんたは結婚できないのよ」

臍を噛む三号を、マヒルは勝ち誇って見下す。

そこでマヒルは、すかさず一号に水を向けてみた。

「一号。一号って独身なの？」

すると、三号が口を挟んだ。

「あ、一号は独り暮らしですよ」

二号とマヒルが、一斉に三号を振り返った。

「え、なんでお前そんなこと知ってんだよ？」

「ちょっとぉ。なに？　三号、アンタ、一号の家に行ったの？」

自身の思いっきり脇の甘い失言のせいで、二号とマヒルからの一斉攻撃を受け、三号はただただ泡を食っていた。

だが、そこに正義の味方のように助け船を出したのは、一号だった。

「日曜の夜、三号を泊めたからな」

どよどよどよ。

二号とマヒルは、二名の人間がどよめくことが出来るレベル以上のどよめきを巻き起こした。

「え、あのさ、一号。お前、三号を自宅に泊めたんだ？」
二号の問いに、一号は涼しい顔で答えた。
「いや。自宅というわけではないが」
「じ、自宅じゃないの？　あそこ。じゃあ、あの部屋は何なんですか？　え？」
混乱した三号が、猛烈に甲高い声を上げた。
今度は三つ先の席に座っているおじさんまで、こちらを振り返っている。
「出ようか？　な？」
二号がグラスのビールを一気に飲み干して、そそくさと席を立った。
店を出たところで、二号がまた口を開いた。
「あ、オレ、G座一丁目駅の方から帰るわ。その方が一駅近いし」
……G座一丁目？　あれ。あの看板？　あそこ？
「へー。Y楽町駅のこんなすぐ側に、G座一丁目駅の入口があるんだねえ」
いまさら気がついて驚くマヒルに、一号が言った。
「あそこから地下に降りても、改札まではかなり地下のコンコースを歩く事になるがな」
「ふーん。じゃあ、あたしもG座一丁目から帰ろうっと。みんなどうせY楽町線なんでしょ？　行こ行こ」

G座一丁目駅のコンコースは、ホントに長かった。
しかも、東京の繁華街のただなか、金曜の夜だというのに、びっくりするくらい人っ子ひとりいないのだ。
「ひえー。ここ、なんか異世界空間みたいじゃん」
マヒルの素っ頓狂な声だけが、コンコースに響き渡った。
蛍光灯と太く丸い柱が、永遠に続くかのように、向こうの方まで、ずうっと並んでいる。
「ねえ、一号。あんたN田町駅を使ってるけど、立法府の人間じゃないって事は、あたしには分かってんのよ」
これまで、なんとはなしに誰も一号の前では口にすることの出来なかったマヒルの一言に、二号と三号は、息を飲んだ。
「まず、N田町駅の六番を出るって言うところがね。あたしだって、コンビニに寄る用事でもなければ、六番は出ない。それで考えると、砂防会館とかの方かとも思うけど」
「けど？　何だ」
一号は余裕しゃくしゃく、涼しく受け流している。
「そういう特殊法人っぽい、おっとりさは皆無なのよ、あんたは。となると、可能性があるのは、最高裁と議長公邸」
「ほう？」
一号は、じっと、マヒルを見つめ、かすかに口元を緩めて微笑した。
はっきりいって、やっぱ、この笑顔は、結構カッコイイと思う。

くやしいんだけれども、ちょっとドキドキしちゃうので、マヒルは一号から、目をそらした。

「まず、司法じゃないでしょ。絶対」
一号は、無言でマヒルの方を見つめている。二号と三号も黙ったまま、事の成り行きを見守っていた。

「一号って、なんかどこか『キナ臭い』んだよね。だから。司法の人間じゃない」

「ほほう？」
一号はまた、ニヒルに微笑みながら言った。

「ヒント、一号。ヒントくれ」
突然、二号が軽い感じで口を出した。やっぱ、コイツ、確信犯的にキレンジャーなのでは？

二号の言葉に、一号は、軽い笑い声を漏らして言った。
「……茱萸坂のてっぺんには、何がある？」

「記者クラブ。国会の」
マヒルが即答した。

「衆議院の議員会館、第一の方？」
二号も続く。

「今、立法府じゃないって、言ったばかりじゃないですか？」
とりあえず、三号は人の失点を責めずにはいられない人間であった。

「え、ちょっと待って。坂の『てっぺん』って……！」

と、マヒルが声を上げた瞬間。
数本先にあるコンコースの柱の陰から、人影が飛び出してきた。
……あれは！　さっきの店の、あのクソ失礼な。
隣の席の……
「カップルの女！」
とマヒルが叫ぶと、サンダリスト達の背後の柱の陰からも、男が飛び出した。
やはり、カップルの男の方だった。
女の方は色白だったので、店では何人だか分からなかったが、男は明らかに東南アジア系。小柄な体ながら、なんか、こう動きが違う。
そこで女の方が奇声を発しながら、マヒルに躍りかかった。
「うそぉぉ。ちょっと、なに、これぇぇっ？」
マヒルは、とりあえず盛大な悲鳴を上げて、女を避けようとしたが、ドターンと床にぶっ倒れた。
女は、そのままマヒルを捨て置くと、サンダリスト達の方へと駆け寄った。
男の方は、もう想像通りって感じで。つまり、「ハイ、ワタシ、ムエタイ選手ですが何か？」ってな具合で、次々、技を繰り出している。

その矢面に立っているのは、やはり想定通り、キレンジャー＝二号だった。

凄い速さで繰り出される男からのキックをかわし、パンチを手で受け止めている。

つか、二号、文科省の統計処理以外に、あんた何やってた人なのよ？　一体。

「会長ぉ、大丈夫か！」

そんな死闘の最中にも、マヒルに声をかける二号、キレンジャー。

「だ、だいじょうぶじゃないよぉぉ。痛いよぉ」

恐怖のあまり、さすがのマヒルも半泣きで、パニックを起こしている。

すると、二号への狙い撃ちを決め込んで、男と一緒に攻撃を加えてくる女の方を排除しようと奮闘していた一号が叫んだ。

「それだけ肉がついてれば、大丈夫に決まってるだろう！」

「ひ、ヒドい。肉がついてたって、いたいもん、いたいよ。うううう」

泣き声をあげたマヒルに、一号は続けて、叱責の声を飛ばしてきた。

「いいか、自分のことは、自分でなんとかしろ、大人なんだから！
　マヒル、　さっさと立て！！」

しかし、一号のその声は、攻撃をしかけてくる女の奇声により、すぐにかき消された。

女の長い爪が、一号の喉元に食い込んでいく。

「……！！」
マヒルは、バネのように立ち上がると、女の方に向って全力で走った。

「コップン・カァァァァァァぁぁぁ」
一声吠えると、マヒルは思いっきり、女に体当たりを食らわせた。

タイの華奢な女など、加速のついたマヒルの肉弾の前には、風の中のタンポポの綿毛のような物だった。
すんでのところで身をかわした一号の横をすり抜け、女は数メートル先まで、コンコースの上を吹っ飛んでいった。

そして、「マイペンライ」と一声発すると、その場で動かなくなった。

女がやられたことに気を取られたムエタイ男の首筋に、二号のチョップが決まった。
男は、あっけなく床に沈み込んだ。

二号は荒くなった呼吸を、合掌しながら鎮めている。

目を開けて、合掌をほどいた二号が言った。
「つかさ。会長、敵にお礼言ってどうすんだよ？」

「え？」
マヒルが目を丸くしていると、どこか向こうの方から声がした。

「『コップンカー』は、『ありがとう』でしょうが！」
三号の声だった。

ヤツは柱の陰に座り込んでブルっていやがった。
ホントに使えない。まあ、邪魔になんなかっただけ、マシといえなくもないけど。

「だって、他に知ってるタイ語なかったんだもん、つか、こいつら、一体なんなのよぉ」
二号の足下に倒れているムエタイ男を探ろうと、マヒルは手を伸ばした。

すると、一号が凄い力で、それを押しとどめた。
「触るな。こいつらを調べたって無駄だ。とにかく、すぐにY楽町線に乗るんだ。早く！」

マヒルとサンダリスト達は、床に倒れたままのタイ人カップルを残し、コンコースを急ぎ足で駆けていった。

20

２０

Ｇ座一丁目の駅っていうのは、Ｙ楽町線の中でも、存外、乗降客数が少ない方の駅なんじゃないだろうか。
改札を入って、ホームに降りても、そんなに人影はない。

まあ、全くの無人というわけでもないが、逆に、これくらいの人数しかいないと、駅にいる客の全員がグルで、みんなどこかの組織のムエタイ戦士なのではという妄想もわき起こってくるマヒルなのであった。

「いやあ。会長があの女に、体当たりした時、何か凄い衝撃波が伝わってきましたよ。昔、僕、交通事故見たことがあるんですけど、あんな感じでしたね」
色々混乱している三号が、なぜ今そんなことを？　と思うようなワケ分からんことを興奮してしゃべり出した。

「ちょっと、三号、あんたね。あたしが身を挺して一号をかばったからこそ、結局あのタイ人ウォーリアーズを倒すことが出来たんでしょうが、え？」

「それにしたって重量ありすぎでしょう。会長、体重何キロあるんですか、一体」

「三号、お前。ばか、そういうこと訊くなって」
二号がすかさずいさめるが、三号は聞かなかった。

「普通、女性といったら、四十何キロとかそんなもんなんでしょう？　こんなに重いわけない」
それを聞いた二号が、苦笑しながら三号に言った。
「二号、女なんか、基本、体重は五キロ、十キロ、サバ読んでんだよ。四十キロ台の女なんか、そんなにいないの」
「十キロ！　それはサバ読みすぎじゃないですか、あり得ないでしょう」
ムキになって反論する三号に、今度は一号が声をかけた。
「三号。もうそれくらいにしておけ。それじゃあまるで、一回も女に乗られたことのない男みたいだぞ」
一号のこの言葉に、三号はぐっと息を飲んだきり、二の句が継げなかった。
「おっと、図星か？　チェリー」
二号が小声で言うと、三号の顔はみるみる赤くなるのであった。
「ねえねえ。三号、じゃあ男にはあるの？　乗っかられたこととか、ねえねえ」
マヒルのツッコミも容赦なかった。
すると、かび臭い風が強く吹いて、ホームに電車が入ってきた。
「おい？　お前ら、そういえばこっちのS木場方向でいいのか？　N田町方向は、階段上がって向こうだぜ？」
二号が風に顔をしかめながら言った。

「えええ。イヤだよ。このまま独りで地下鉄とか乗り換えて帰るの。超怖いんですけど」
マヒルが情けない声を上げると、三号もこれに続いた。
「僕だって、これからTノ門戻って、夜の庁舎で仕事するのイヤですよ」
「あのさ、奥さん達、今日、実家なんでしょ？　二号ぉ。ね。二号の官舎に泊めて、お願い、ね、ね？」
マヒルがこう言った途端、列車のドアが開いた。
三号も同様に、視線で懇願している。
発車サイン音が鳴った。
「……で、何だよ。お前等。結局みんな、こっちに乗るのかよ」
二号に続いて、マヒル、三号、そして一号が乗り込んだところでドアが閉まり、Y楽町線が動き出した。
「一号、お前も来てくれるのか？」
ちょっと、二号ってば、一号だけには、来て「くれる」ってなによ、それは？
一号は頷くと、いつものシブーい低音で答えた。
「二号、お前一人で、この二人を連れてたら、何かあった時、足手まといで動けないだろう？」
はあ。すいませんねぇ、足手まといで。
つか、一号さ、あたしに命救われたこと、なにげに忘れてるんじゃないでしょうね。

「何かって。イヤですよ。また何かあるんですか。もう勘弁して欲しいです」

一人で隠れてブルってただけのくせに。

三号。とことんチキンなヤツ。サンダリストの風上にも置けない感じ？

「……まあ、しかし、びっくりしたよな、さっきは」

二号がしみじみと振り返るように言った。

その落ち着きっぷり、なんなの。さすがキレンジャー。

「ほら、こういう事もあるかもしれないから、戦闘用にベンジョサンダリストの決め台詞、作っとくべきだったんじゃん！」

マヒルは捨て置かれていた決め台詞のことを、決して忘れていたワケではなかったのだ。

「決め台詞。ああ、そんなんあったなあ。そういえば」

二号が頷きながら言う。

三号はバカにしたように、鼻息を立てた。

一号は顎の下に親指と人差し指を当て、じっと目を伏せていたが、ふとこう漏らした。

「決め台詞かどうかは別として。あの中では、『案１』が出来としては一番マシだったかもしれないな」

21

21

その日の国会前庭園の風は、もう真冬の冷たさだった。

庭園内の木々の葉っぱは、ホントにみんな落っこちてしまっている。

あら、ここんちは、みんな落葉樹ばっかりなのねぇ。掃除が大変そう。

なんてことを考えつつ、マヒルは北風に対抗して、ダウンジャケットの前を一所懸命かきあわせていた。

……そろそろ、『友の会』の場所、どっかに移すべきかなあ？　霞ガーデンの横の団体客がお弁当食べるとことか？　でも、あそこいまいち、辛気くさいのよねぇ……。

なんてことを、引き続きマヒルがつらつら考えていると、佐藤さん（仮）のバグパイプが、豪勢に音を立てた。

佐藤さん（仮）は、相変わらず、Tシャツにジャージで、顔から汗をだらだらとこぼしている。

Tノ門方向から三号が、茱萸坂方向から一号がほぼ同時に、バグパイパーの方に向って歩み寄ってきた。

二人とも、手には缶コーヒーを持っている。

すでに、ベンチに座っていたマヒルと二号も、それぞれの両手でホットドリンクを握りしめて暖を取っていた。

「よう、一号、三号、元気にしてたようだな？」
二号が朗らかに声をかけた。

一号は今日は、黒のスタンドカラーのジャンパーを着ていた。どこか海外のアウトドアメーカーのかなって感じだったけど、シンプルすぎて、どこのだかは分からない。だが、それは不思議とマーブル模様の便所サンダルに
―『マツモトのろ一〇三（ひとまるさん）』に、マッチしていた。

三号はおっさん臭く、皆に軽く会釈をしてみせ、缶コーヒーを開けた。

一号が早速に話を切り出した。
「楡山議員から、電話があったんだって？」

マヒルは無言で頷いた。

昨日、火曜日の午前中。
ずっとサボっていた会議の資料の締切りが迫っていて、めずらしく、マヒルは必死に朝から仕事をしていたのであった。

すると、突然、机の上の内線が鳴った。
そう。
何がどう、突然かというと、ヤングな窓際であるマヒルになど、滅多に電話など掛かってこないから、突然っていう感じなのである。

取り慣れない電話を取って「……えー、ハイ」などと要領を得ない応対をしたところで、受話器の向こうで相手はこう言った。

「にれやまじゃ」

……にれやまじゃ？　なに？　え？　このひと、電波？

沈黙するマヒルに、再び声は言った。

「にれやまじゃ」

にれやま。じゃ。

……楡山？

「楡山先生でいらっしゃいますかっ！」

そう、いくらサンダリスト達の頂点に立つマヒルと言えども、ここ（参議院）ではしがない事務員。国会議員は神様である。思わず、受話器を持ったまま、直立不動に立ち上がる。悲しい国会職員の性なのであった。

「お嬢さん、あんたとあんたのお仲間は、なにやら色々嗅ぎ回っておるらしいな？　こういうことは直接、会って話す方が早いんじゃ。どうじゃ？　明日の夕方にでも」

「……！」

「ってことでさ。『それでは、N田町駅で、お目に掛かろうじゃないか。ふぉふぉふぉ』とか言って、一方的に段取られちゃったってわけなのよね」

マヒルが事の顛末を話し終えると、二号が少々苛立たしげに口を開いた。

「『直接会って話す方が早いんじゃ』って。いきなり刺客を差し向けてきたのは、そっちの方じゃねえかよ。楡山って男は、もう少し筋の通った人間かと思ってたのに」

「確かに、なんかこう、これまでのイメージの『人となり』ってものと食い違いますよね」

三号もすかさず同意した。

「でもさあ、あたし、なんかよく分かんないんだけど。なんで楡山議員が『友の会』の動きを察知したの」

「何でって、会長。会長のせいだろ、たぶん」

二号の声に、一号と三号がしっかりと頷いた。

「え、ええ？　だって、みんなだって色々動いたじゃん」

「だが、楡山本人を嗅ぎ回ったのは、お前だけだからな」

……一号にこう釘を刺されては、ぐうの音も出ない。

「でもさ、別に楡山サイドに、直接ちょっかい出したワケじゃないのよ？」

「まあ、それはそれだ。どのみち遅かれ早かれ、こういうことにはなっていただろう」

一号はそう言うと、突然、何かを取り出し、マヒルに差し出した。

「そうだ、これ。二号の家から帰る途中で、落としてたぞ」
マヒルは、一号が差し出したその銀色のビニール袋を見た瞬間、不覚にも耳まで真っ赤になってしまった。
……こ、これは。
「なんだよ？　会長。それ」
二号が不思議そうに尋ねる。
「……履いてみないのか？」
一号はそこはかとなく渋い、そして、そこはかとなく優しい微笑をたたえている。
……んもう。この笑顔で、三号を陥落させたのね。一号、あんたってば。
「中、見たの？　一号」
マヒルがちょっと責めるように言うと、一号は涼しく受け流した。
「いや。見ていない。だが持った感じで、大体分かる」
二号と三号の、好奇心ではち切れそうな視線に耐えきれなくなって、マヒルは、ビニールの中身を取り出した。
履こうと思いながらも、ずっと履けなかった。
履こうと思いながら、カバンの中に入れ続けていた。
マイ・ファースト・便サン。

マイ・ファースト・ナカガワ……。
「……ほう。これはナカガワの」
一号が軽く驚きの声を上げた。
やっぱり、中は見てはいなかったんだ……。
「二〇〇一年限定生産のヤツだな。しかし、よく、こんなレアなの見つけてきたな、会長。どこ？　店」
二号が、オタク丸出しの口調で巻くし立てた。
「えっと、ＮＫ山駅前の履物屋。その店は、去年つぶれちゃったけど……」
マヒルは、おずおずと答える。
「足型は同じなんですけどね。ナカガワはあの時期、ちょっと色んなカラーを出してたことがありましたね」
三号も負けじと知識をひけらかした。
「なかなか、いい買い物だったな」
一号が言った。
「……えへ？　そう？」
一号に誉められるって、なんか悪い気しないわね。
「このブルーが何ともいえないよあ。当時、もう一色、光沢感のある濃いのも出てて。オレはそっちをパライバモデル、これをターコイズモデルって呼んでたけどな、まあ勝手にだが」
「……パライバって、あのトルマリンの？」

思わずマヒルが聞き返す。
そこで、一号が、ふっと一息、軽い笑い声を漏らした。
「な、なんだよ、一号？」
二号がそれに食いついた。
「いや。意外と、ロマンティストなんだな？　二号」
この台詞には、何と、二号までも、頬を赤く染めて俯いてしまった。
一号め……。
おぬし、一体、何人切りするつもりだい？
「履かないのか？　会長」
二号にも促され、マヒルは「えいやあ」と心を決めた。
水色のナカガワをベンチの前に置き、右、そして左と足を滑らせた。
「サイズはばっちりみたいだな、な？　一号」
二号の言葉に一号は、黙って頷いた。
そして、二号は、三号の方を無言で振り向いた。
三号は一号の斜め後ろに立って、じっとマヒル達の様子を窺っていたが、二号と視線が合うと、眼鏡を指で押し上げながら言った。
「まあ、悪くないんじゃないですか？　会長らしくて。レアカラーなんかを選んでくるあたりが」
言い方は相変わらずカンに障るのだが。まあ、いつもの三号よりは、何か可愛げがあるような感じだ。

「で、楡山とは、いつ会う約束なんだ？」
一号が、急に話を戻した。
この仕切り方、一号らしいや。
「今晩、九時半。N田町駅のロングエスカレーター降りて右の廊下」
マヒルがこう告げると、サンダリスト達全員が、しっかりと頷いた

22

22

週真ん中の水曜日。
夜九時半のN田町駅は、残業終わりの人の流れも、大分、途絶えている時間だ。

ロングエスカレーター降りて右の廊下、ちょっとした広場と言っていいほどの幅がある通路だが、特に通る人が少ないところである。

なぜだか分からないが、エスカレーターを降りてきた人々は、左側の廊下に流れ、上ろうとやってくる人も同じ側からしかやってこないからだ。

その時も、その場にはサンダリスト達以外の人影はなかった。

と、エスカレーターから降りてきたひとりの人物が、右に折れ、マヒル達の方へと歩み寄ってきた。その足音は、紛れもなく便サンを履いた足のものであった。

現れたのは、ある時期には、テレビの画面で見ない日はなかった有名な顔である。
「楡山じゃ。呼び出てしてすまなかったのう」

楡山平八郎は、マヒルとサンダリスト達の足下に、鋭い視線を走らせた。

老いたとはいえ、まだまだ現役の、しかも超大物政治家である。そ

の眼力は、そんじょそこいらの迫力ではなかった。

しかし、次の瞬間、楡山は、好好爺然とした笑みを、満面にたたえて言った。

「マツモト二人に、ナカガワ二人かね。なんといったかな？　お前さん達の集まりは」

「……『ベンジョサンダル友の会』です、楡山先生。わたしが会長の岡野マヒルです」

半ば突っかかるように、立ち向かっていったマヒルに、まるで孫をあやすような笑みで頷き返す楡山だった。

「そうそう、まず、お前さん達に一つ謝らんとな。ビュー、フォー」

楡山が声をかけると、廊下に並んでいる太い柱から、男女が現れた。

げげ。コイツラは。

マヒルの頭に、G座一丁目駅のコンコースでの死闘がフラッシュバックする。

なに、なんなの？　東京の地下鉄の柱からは、なんですか。ムエタイ戦士が湧いて出てくる仕様でもあるんですか。

「お前さん達に、いきなり危害を加えようなどとして、悪かったのう」

首に包帯を巻いた男と、片腕を三角巾で吊った女が、楡山の後ろでおずおずと頭を下げた。

あら。なんか結構なお怪我してらっしゃるみたいね……。それとも大げさにやってるのかしら？

なんて考えていたマヒルと、頬に青タンをこしらえた女の視線がかちあった。

「こ、こっぷんか」

とマヒルが思わず呟いてしまうと、向こうの女もすかさず「まいぺんらい」とつぶやいた。

「時に、楡山さん。我々と『直接』話したいことと言うのは？」

どんな時にも、さくさくと場を仕切る一号が、話を戻した。

「『サカキ・インターナショナル』の件じゃ」

楡山も、ずばり核心に踏み込んできた。

「お前さん達が、あの会社やわしのことを嗅ぎ回っておったのが、気になってな」

「楡山さんにまで行き当たったのは、行きがかり上のことです。我々は、便所サンダル市場で最近、大がかりな買い占めが行われていることを調べていただけですから」

楡山は、黙って頷いた。一号の話を促すつもりのようだ。

「今年に入って、小売への便サンの供給が激減しています。このままでは、今年は例年の四割程度しか物が出回らない恐れがあります」

一号は淡々と続けた。楡山の後ろにいるムエタイ男は、じりじりと殺気を募らせている様子だった。

彼の戦士魂に、あの日、一号と二号が火を付けてしまったとでもい

うのだろうか？

「楡山さん、あなた『サカキ』の社長とお知り合いでしたか？　勿論、『インターナショナル』の方ではないサカキのことです」

一号のこの問いかけに、楡山はふと目を細めた。

「懐かしいのぅ」

数回頷いてから、楡山は話を続けた。

「もともと、わしは、あそこのサンダルを気に入っておって。わしは、武蔵、下野の山奥の出でな。革靴なんぞ履くと、足が痒うなる。榊さんとは、いい友達だった」

「……政治家人生初期の、一番の支援者でもあったわけでしょう？」

一号が切り込むと、楡山は、ふぉふぉふぉ、と御大っぽく笑ってみせた。

「まあ、『大人同士』の友達じゃからの？　持ちつ持たれつというのもあったかもしれん」

……ああ、そっか。

サカキ。シェア七割とか言ってたっけ？

「では、『サカキ・インターナショナル』のミキオ・プーンタラット氏とのご関係は？」

一号が淡々と続けた。

「おお、ミキ坊はなあ、大学もほっぽり出して、背嚢背負って、とうとう日本に戻ってこんようになったなあ、なんぞああいうのが、若い物の間では流行っているんじゃろう？」

「……最近は、あんまり」
マヒルが思わず口を挟む。
「榊幹夫さんと、ミキオ・プーンタラット氏は、同一人物なんですね？」
一号が念を押す。
「何年前じゃったか、ミキ坊から連絡があってな。便サンの『サカキ』ブランドを再興したいから、協力してくれないかとな」
……お家再興ですか？
はあ。なんとまあ、古風な。
「とはいえな、ミキ坊はタイのおなごと結婚して、ヒモ同然の暮らしぶりでなあ。お前さん方は知らん時代だろうがのう。あの国は、先だっての戦争に関わらないでおれた国だからのう。列強の植民地化も免れてな。あの国に行くと、駄目になる外国人が多いんじゃなあ、なんも頑張らんでも、あの国では生きて行かれるからなあ」
「……たいじん、つかれることきらい、たいじん、はしらない」
楡山の後ろのマイペンライ女が口を開いた。
なるほど、日本語も分かるんだね。
「わしも歳を取りすぎたのかもしれんが。『サカキ』のサンダルと聞いて、どうにも懐かしくなってな。ほれ、ナカガワは、今はサカキの型でつくっとるから、今履く物に不自由はしとらんがな。しかし、ナカガワの所も、マツモトの所も、もういい歳だが跡継ぎもおらんじゃろう？　一つ、ミキ坊の話にかけてみようかと思ったんじゃ」

「……その便サンが、タイ製でも？」
マヒルは、思わず口を挟んだ。
……便所サンダルが、メイドイン・ジャパンじゃないなんて。
楡山は、ニッと歯を見せて笑い、マヒルを見た。
「そうじゃな。やはり、今はどうやっても海外の安物とマツモト、ナカガワとの差は歴然じゃ。だが、日本の物作りもある程度行き詰まってきておる。携わる者が減っとるのじゃから。その点、ミキ坊は、本物を知っておる人間じゃ。タイで、サカキのサンダルを再現してくれるんじゃないかと、少し期待をかけてみたんじゃ」
一号は、黙って楡山を見つめている。
「だから、何人か人を介したが、ミキ坊の会社が工業団地の設備を使えるよう口利きもしてやった。これはわしのやり方じゃあなかったがの、まあそこはきれい事ばかりも言われんところじゃ」
「で、自社製品を売り込む隙間ほしさに、ミキオ社長は、日本のサンダルを買い占めるような真似を始めたってわけかい？」
二号が、苛立たし気に口を開いた。
「随分と、しみったれた真似じゃないのか？」
楡山は、そこで深い溜息をついた。
「その、買い占めとやらの件については、わしも数日前まで知らなんだ。あんた達が何を調べているか追っていて、初めて気がついた。こっちでも調べたんじゃ。ミキ坊が何をやろうとしておるのか……」

楡山は、しばらくの間、黙り込んだ。
たまたま、エスカレーターを降りて、右に曲がってきた歩行者が、目の前で繰り広げられている何事かの異様なムードに気圧されて、後ずさりしていった。
「シェアへの食い込み目的で、サンダルを買い占めておるようならば、まだましな方じゃったよ」
楡山はそう言って、再び溜息をついた。
「あれはなあ、ミキ坊はなあ。結局、サンダルを作れなんだ。最初は、マツモトやナカガワの猿まねでもいいから、作ってみればいいと思って見ておったよ。それも出来んで……。買い占めたサンダルにサカキのマークをつけ直して、市場に出そうとしおった」
「え？　なに？　そんなことして、どうすんの。損するだけじゃないの？　ミキオ・プンなんとかさんって」マヒルは、二号の脇をつついて耳打ちをした。
「いや、多分さ、その資金なんて、やっぱ知れてるから、あれだろ？　楡山議員にせびるつもりだったんじゃねえか？　とりあえず」
二号がマヒルにこう囁き返すと、楡山の後ろからまた声がした。
「たいじん、さきのことあまり、かんがえない、だいじょぶ」
マイペンライ女は、もの凄い地獄耳だった。
つか、ミキオは、既にタイ人のくくりなのか？
「それはいかん、これはもういかんのじゃ。泥棒と同じじゃ。わし

は、そういう、こすっからい男にはもう付き合えん」
楡山は声を震わせた。
「で、楡山さん。あなたは『サカキ・インターナショナル』から手を引くと」
怒りと落胆で震える楡山に、一号は特に心動かされる様子もなく、再び淡々と話を進めた。「それで、我々にはどうしろと？」
「もう、ミキ坊には、マツモトにもナカガワにも悪さはさせん。わしの、楡山平八郎の名にかけてな。もちろん、お前さん方にもじゃ。だから……」
「……だから、一切を忘れろと？」
三号が口を開いた。若干甲高くはあったが、いつもよりも威厳というものがある声だった。
楡山は黙っていた。だが、やがて再び口を開いた。
「お前さん方のことも、少々調べさせて貰ったがの。まあ、わしに楯ついて無事でいられるところの役人達でもなさそうではないか？」
「……悪かったな、木っ端役人で」
二号が露骨に怒りをむき出しにして言った。
楡山の後ろのムエタイ男は、まだひたすらに殺意を燃え立たせているようで、メラメラと炎を燃えたぎらせた瞳で、二号を見据えている。
そのムエタイ男とガンの飛ばし合いをしている二号の隣に立っていたマヒルが、一歩前に出た。

「いいですよ、忘れましょ？」

サンダリスト達と楡山が、一斉にマヒルの方を向いた。

「別に、先生の脅しに屈したんじゃないです。言うなれば『武士の情け』です。これは」

二号が、口を開こうとしたのを、一号がそっと視線で押しとどめた。

「楡山先生、わたし、うかがいました。第一次安保の頃の、あの話を。まだ、先生は当選回数も少なくてお若かった。本会議採決の重要局面で、あえて先生が便所サンダルで議場に入ろうとした話です……。結局、票数のシビアな案件の採決に参加できず、そのせいで、かなり長い間、党内で冷遇されたってこと」

「随分と、古い話を持ち出したもんじゃな、お嬢さん」

「あの事件の顛末については、色々と裏があったとか、なかったとか。政治記者達が、後々詮索した本なんか出していたみたいですね」

「そうじゃったな。対抗派閥に寝返りを計画していたとか。国対と幹事長からの密命でワザと採決に参加しなかったのだとか。まあ、色々言われておったようじゃ」

楡山は、また好好爺然とした笑いで、場を煙にまこうとしているようだった。しかし、マヒルは、そんな楡山には構うことなく続けた。

「そのどれもが、ハズれで、そのどれもがアタリなのかも知れません。でも、わたしは結局の所、それが、楡山先生の便所サンダルへの愛情からのことだったのではないかと思うんです」

楡山は、初めて真剣なまなざしでマヒルを正面から見据えた。
「……なんじゃったかな。『ベンジョサンダル友の会』とおっしゃったか。お嬢さん、あんたさんが会長さんなんじゃな」
「ハイ」
マヒルは自信を持って返事をした。一号も、二号も三号も、皆、同時に頷いていた。
「わしも、もう少し若かったら。お前さん方の会に入れてもらえておったかのう？」
楡山は、こういうとすぐさま「ビュー、フォー」とムエタイ戦士達に声をかけて、踵を返した。
マヒルからの答えは、聞くつもりもないようだった。
マイペンライ女は、音もなく柱から離れ、静かに楡山の後に続いた。しかし、ムエタイ男は、そうはいかなかった。男はこちらに向って飛び出すと、押さえきれなくなった殺気をむき出しに、大きく一歩、まず、一号の方に向って踏み出した。
一号の足にも力が入った。
その刹那、一号の右足の便サンの履きこみの部分が、プツリと千切れた。
「ビュー！」
マイペンライ女が、鋭く叫んで、男の腕を掴んだ。男は仕方なく女に従い、楡山の方に歩き出した。

攻撃に備えていた二号が、構えを解いた。

「ちょっと、あのっ。楡山先生！」

マヒルが楡山の背中に声をかける。

「あの、なんで？　なんであたし達が、先生を調べてるって分かったんですか？」

楡山は顔だけをマヒルの方に振り返ると、さも可笑しそうに声を立てて笑った。

「あんた、わしと『分館の主』との付き合いが、どれくらい長いかしらんのだなぁ。あれとも、わしらは、持ちつ持たれつなんじゃよ。お嬢さん。議員達の情報の流し合い、化かし合いをなめちゃいかん」

「……え？　あの人って、何者」

鳩豆顔のマヒルに、楡山が追い打ちをかけた。

「あれはなあ。一国会職員の、図書館員の枠組みには、おけん男よ……。衆参の生き字引などと、とんでもない。それどころか戦後議会政治の一時代の重要な役者の一人よ」

そ、そうだよね。あんなにサボってばかりいる人が、何のお咎めもなく、のうのうとやってきてるってことは。って。

……えええ？　そう言うこと、なの？　しかも、あの人って。衆議院じゃなくって、国会図書館の人なの？

おもいっきりショックを受けて固まっているマヒルを、面白そうに見ていた楡山は、今度は一号に向って言った。

「あんたさんが、一枚かんでることが分かった時にな。ちと邪推してしまってのぅ。なんぞ嫌な裏でもあるんじゃないかとな、それで、ビューとフォーにちょっかいを出させてしまったのじゃ」

マヒルと二号、三号は、それぞれに顔に？マークを作って、一号を見上げた。

だが、一号は相変わらずいつもの、ニヒルで涼しい笑顔を浮かべている。

「裏なんかありませんよ。楡山さん。我々は単なる便所サンダル愛好家。『ベンジョサンダル友の会』ですから」

楡山は、それ以上は何も言わず、そのままロングエスカレーターを上っていった。

「……一号？　あのさ、楡山議員と知り合いなの？　もしかして」

マヒルがおずおずと口を開いた。

「いや、顔を合わせて話したのは、今日が初めてだ」

一号は、さらりとかわし、ふと、自分の足下を見下ろした。

「今回は色々とあったが、これもよく保ってくれた。さすが、マツモトだ」

一号は、履きこみ口の千切れたサンダルをに目をやり、つぶやいた。

「これにて一件落着、ってことでいいんかね」

二号が、ぽつりと漏らす。

マヒルは二号の肩を、めいいっぱい力任せに叩いた。

「やっぱり、あたしが見込んだだけのことはあったよ。あんたたちは、真の『ベンジョサンダリスト』だったわ」

「別に、会長のために、色々やったわけじゃない」
一号がすかさず返答した。

……一号、ちょっとあんた、せっかくのいいところを。

すると、いつもの調子で、二号も割って入った。
「まあ、そうはいってもさ、一号。会長以上にオレたちの理解者はいないんじゃないのか？」

ふふん、
そうよ。それ見たことか。

「一号、ご異論は？」
マヒルが、厭味たっぷりに問いかけると、一号は、親指と人差し指を顎の下に当て、しばし沈黙してから、こう言った。

「……その件については、検討の上、後日報告、ってとこで、どうだろうか？」

EPILOGUE

EPILOGUE

N田町駅のロングエスカレーター。
午前八時三十分。

黒のジャンパーの男性。すっきりと伸びた背筋、足。

さっぱりと洗濯されたばかりの紺ソックスに、黄土色の便所サンダル。
そう、おろしたての松本製作所、型番ろ一〇三（ヒトマルサン）。

一段あけて、エスカレーターの彼の真後ろに乗りこみ、マヒルは声をかけた。
「おはよう。一号」

一号は、ゆっくりと振り返り、視線をマヒルの足下に走らせる。

（有）ナカガワのモデルA01。
色番は8。

シンプルに言うと。
水色の、便所サンダル。

一号は何も言わずに、そのまま前を向いた。

エスカレーターが終わり、改札に向かって歩く途中で、一号は人波を避け、少し脇の方に立ち止まった。マヒルもまた、そこで立ち止

まる。

一号は、バックから、小さな茶色い紙袋を取り出し、振り返ると、黙ってそれをマヒルに差し出した。

そして、改札の方へと歩き去って行く。

「一号！」

マヒルが、その背中に声をかけると、一号は、振り返りもせず、立ち止まりもせず、ただ左手を上に伸ばして、一度だけ大きく振った。

そして、自動改札を抜け、人並みに消えていった。

マヒルは、紙袋をしっかりと両手で握りしめる。

開けなくても中身は分かっていた。

ソックスだった。

（ベンジョサンダリスト！完）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0831w/

ベンジョサンダリスト！

2011年10月9日12時53分発行